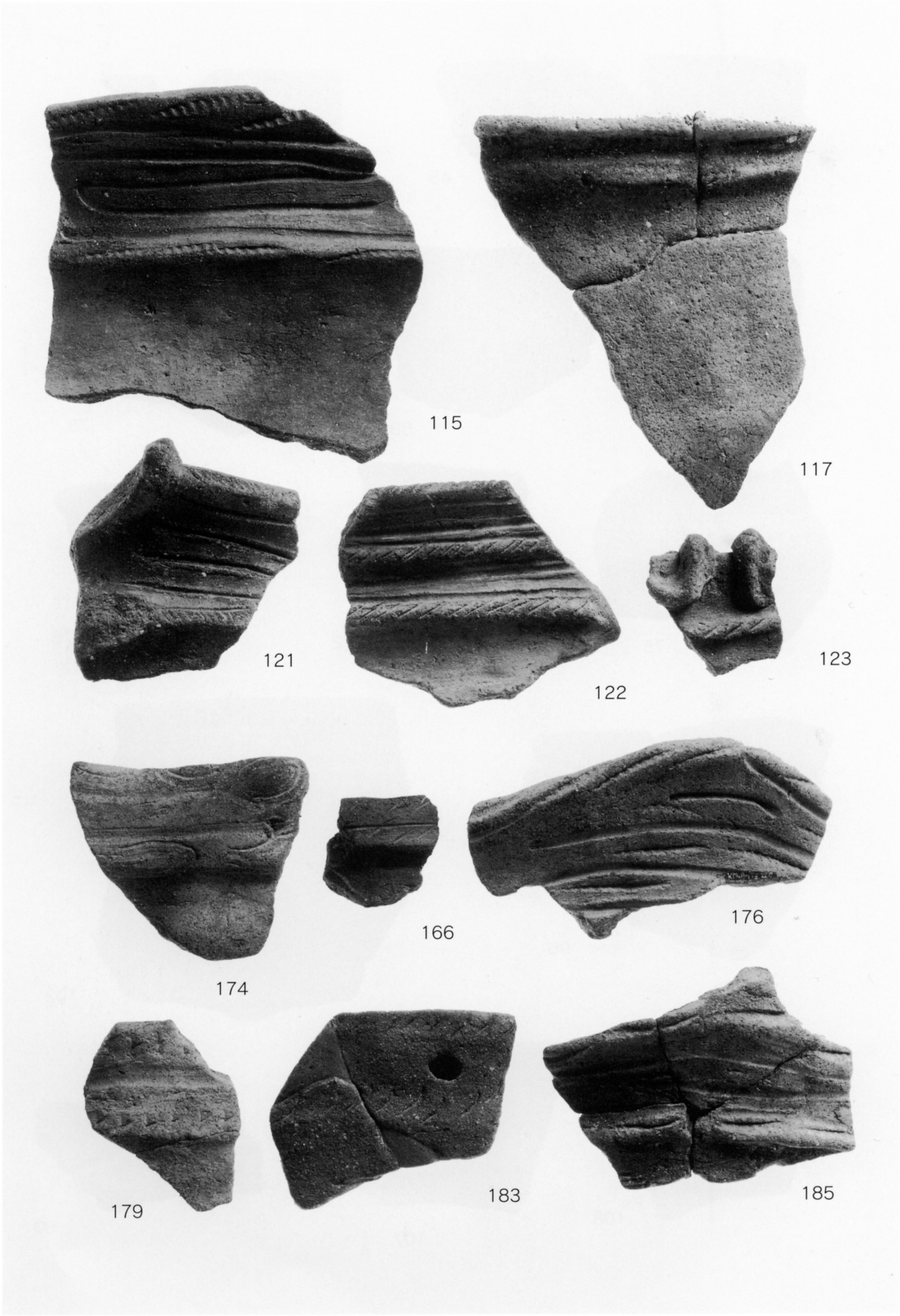
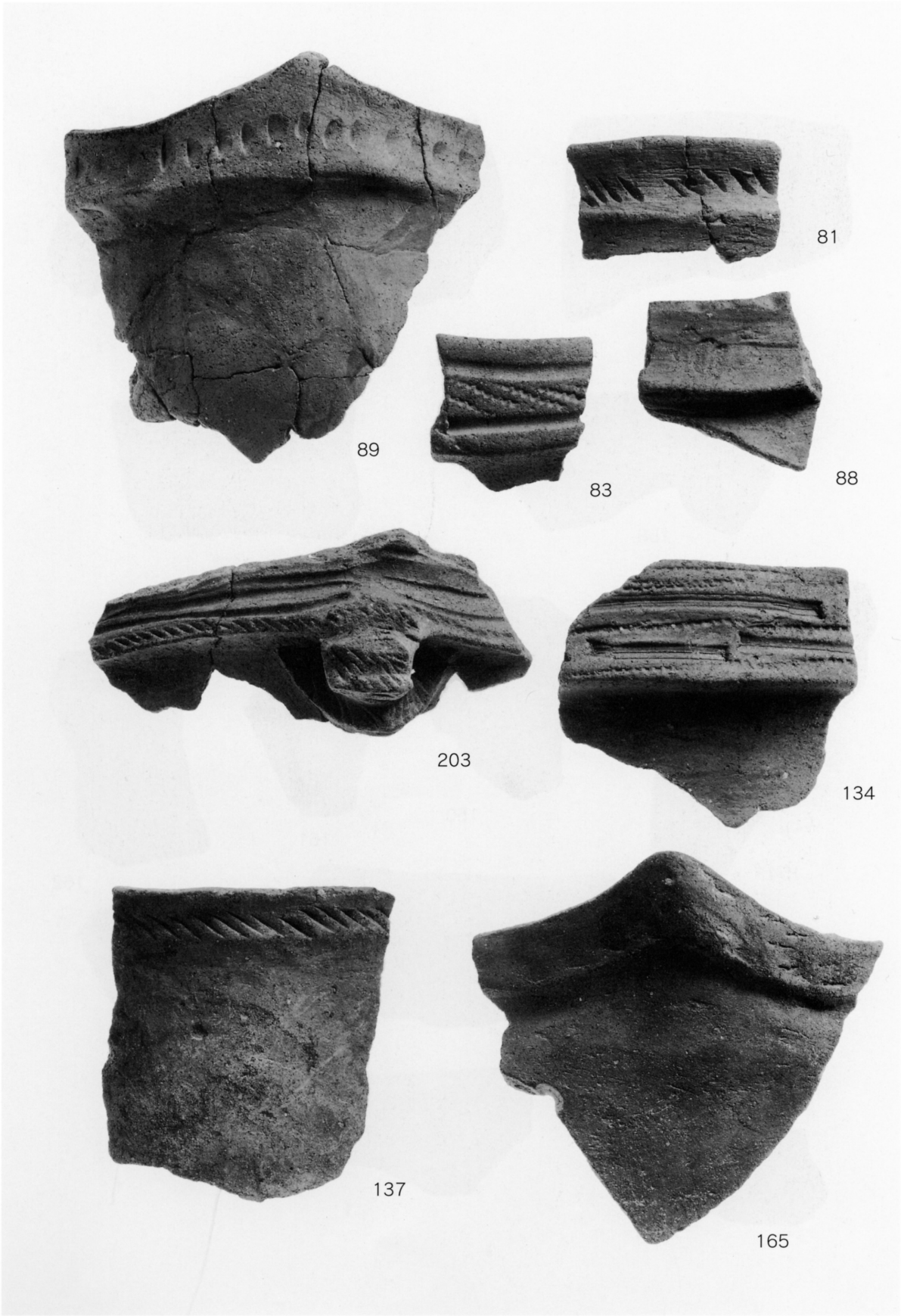
図版16

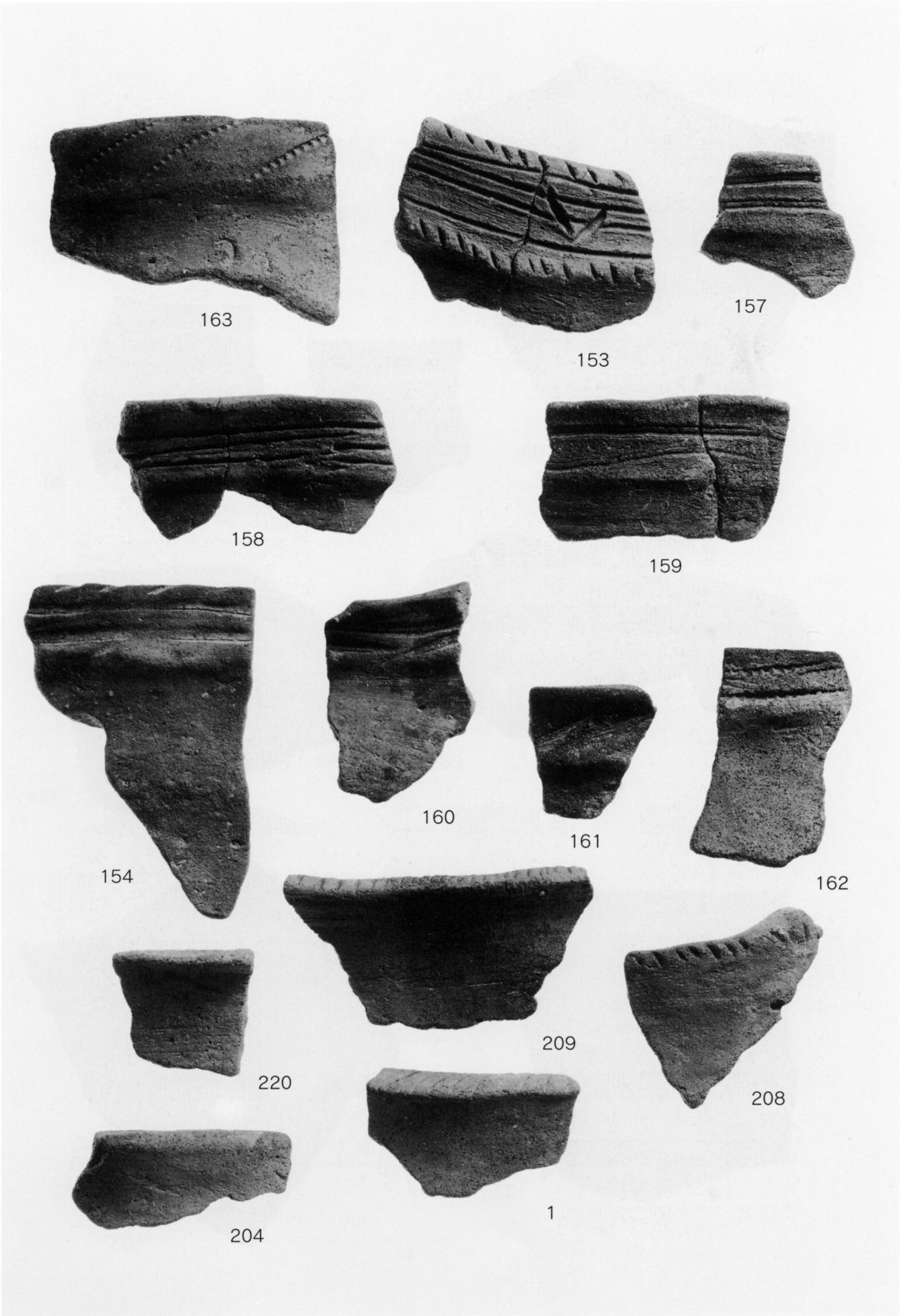


縄文土器 4

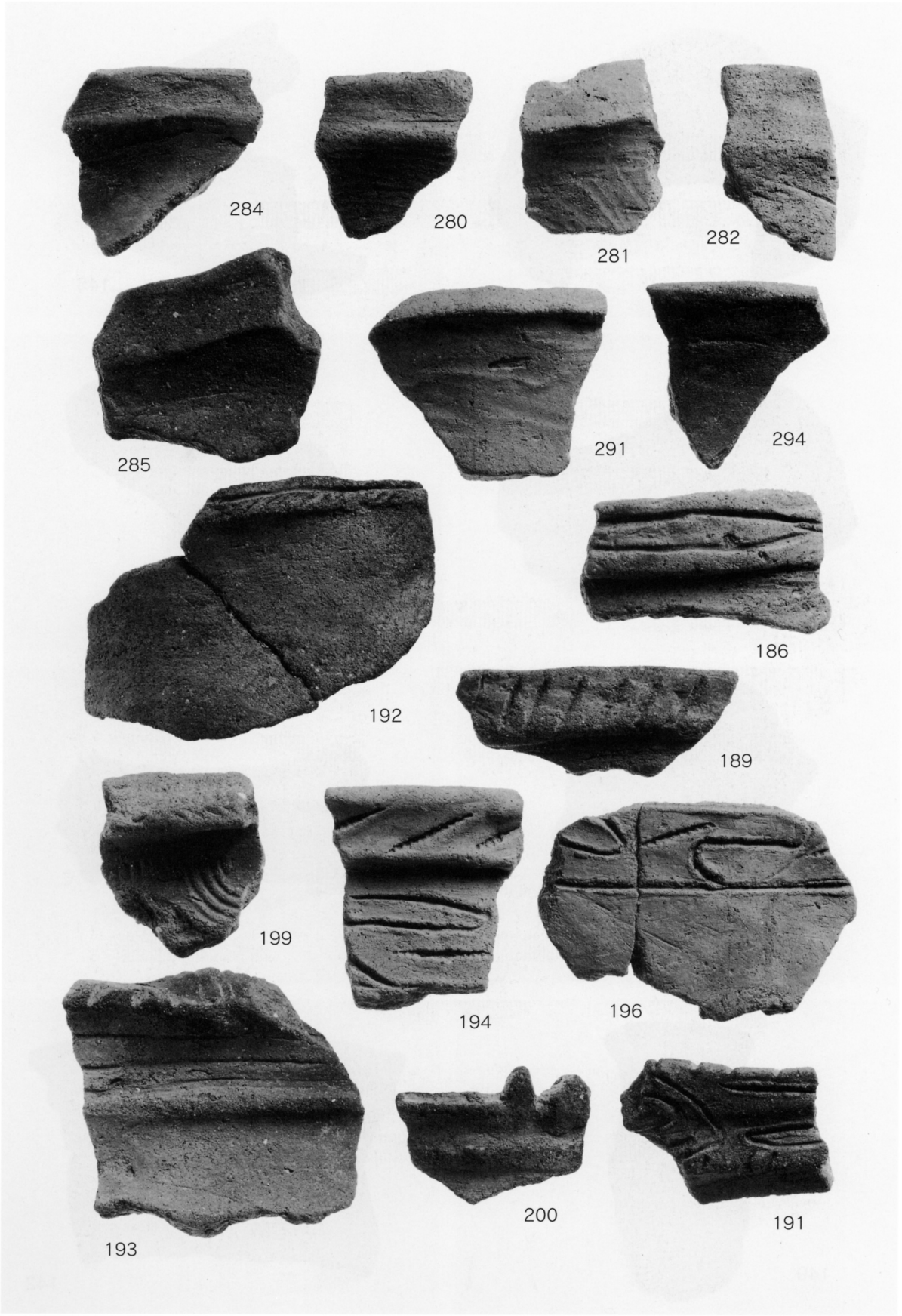


縄文土器 5

図版18



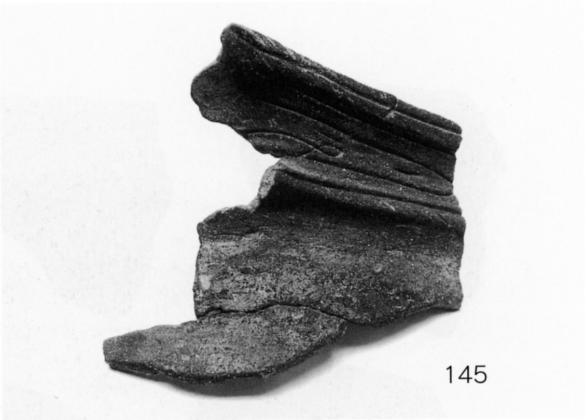
縄文土器 6



縄文土器 7

図版20

147


145

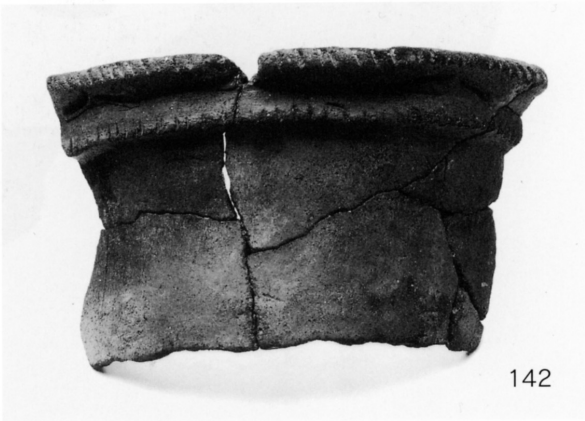
143

144

148

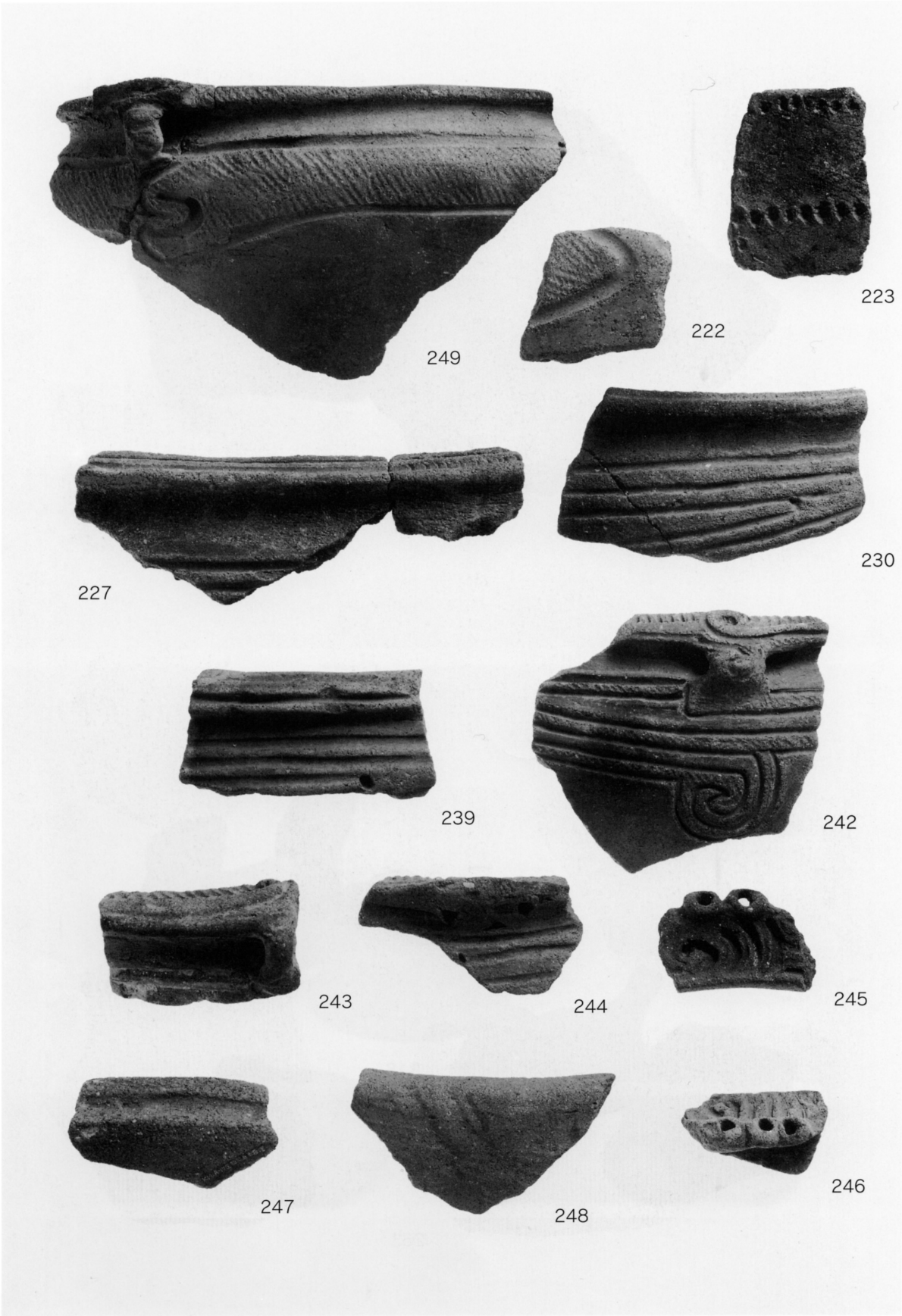
94

149

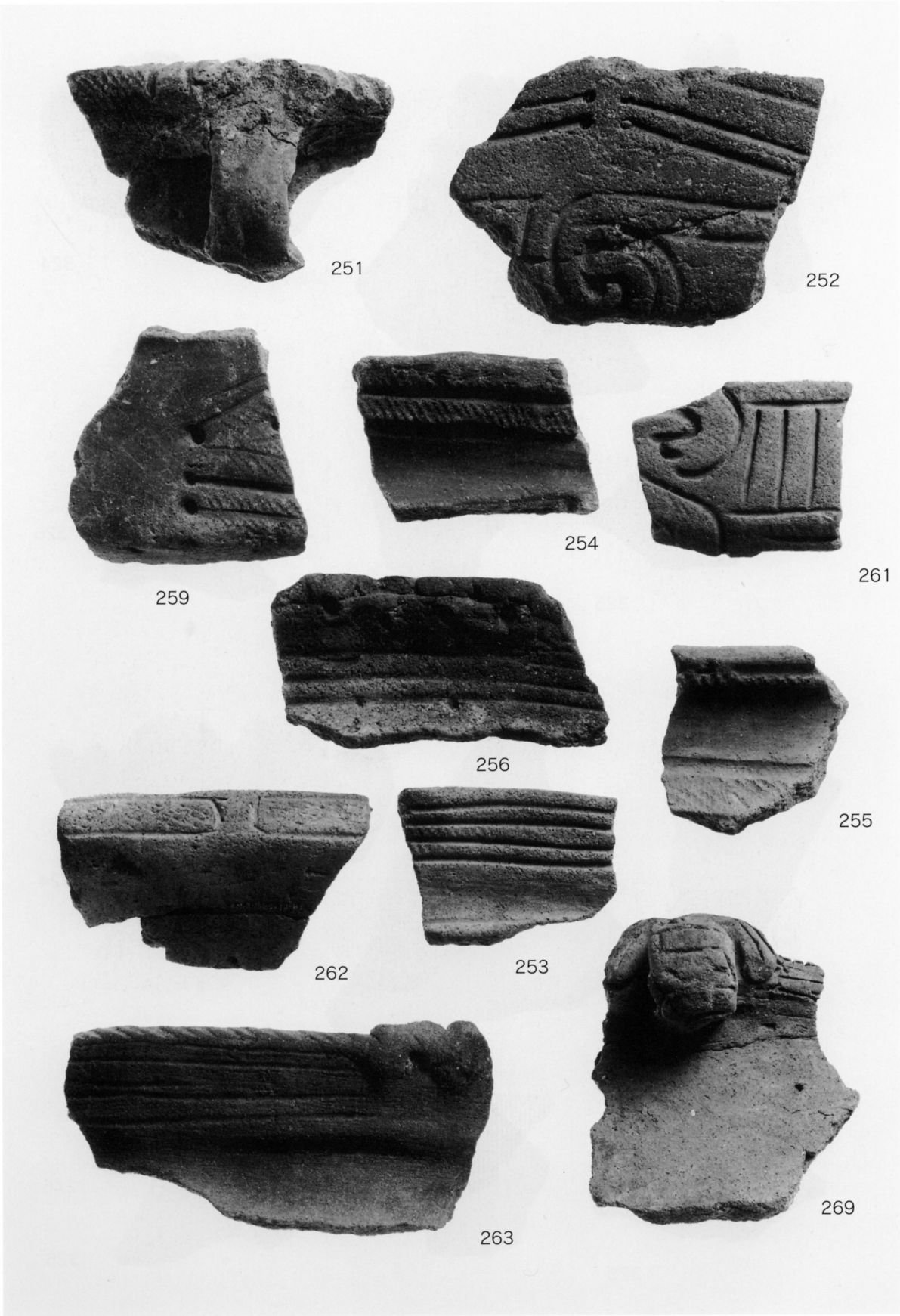

142

縄文土器 8

縄文土器 9

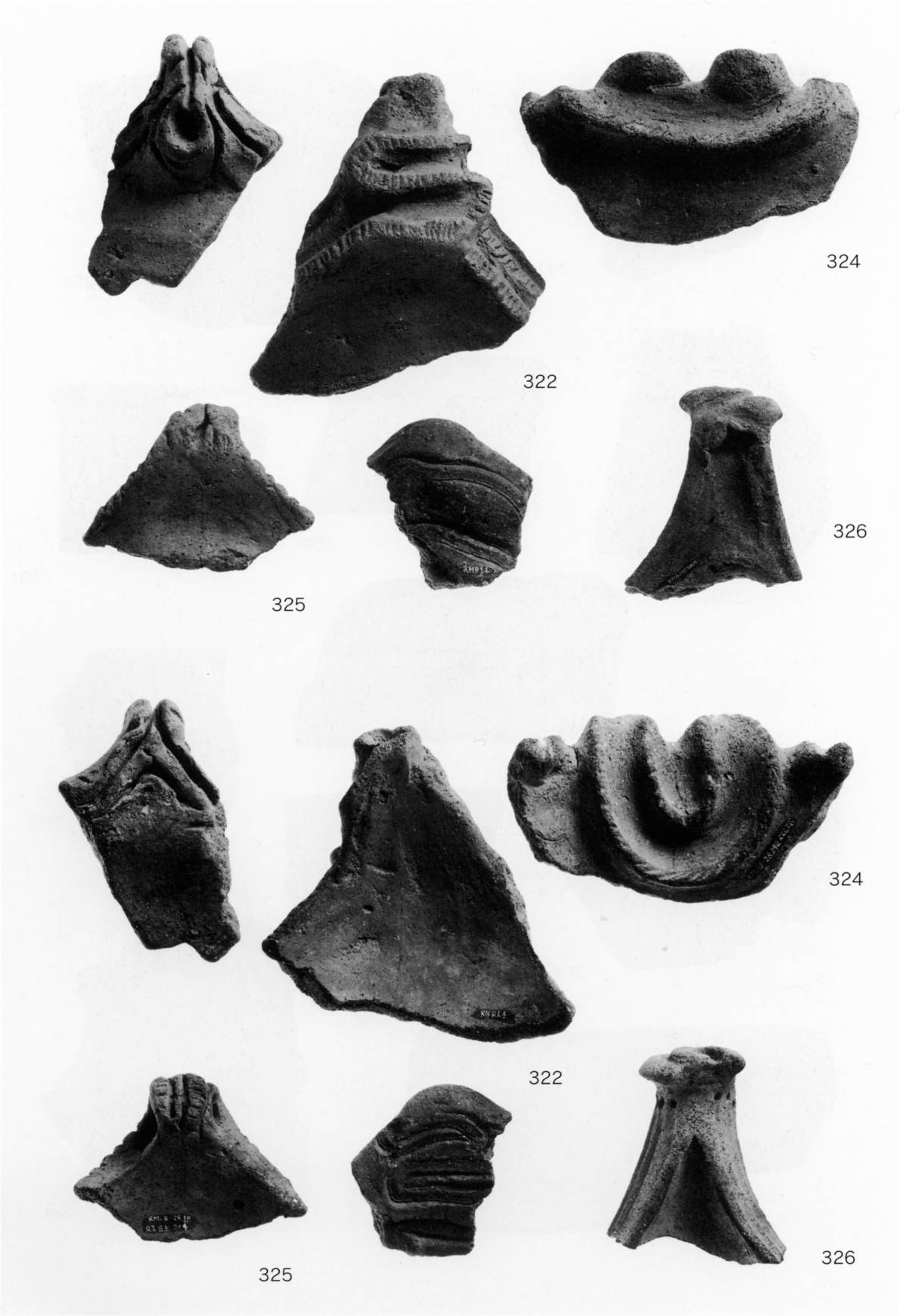


縄文土器10

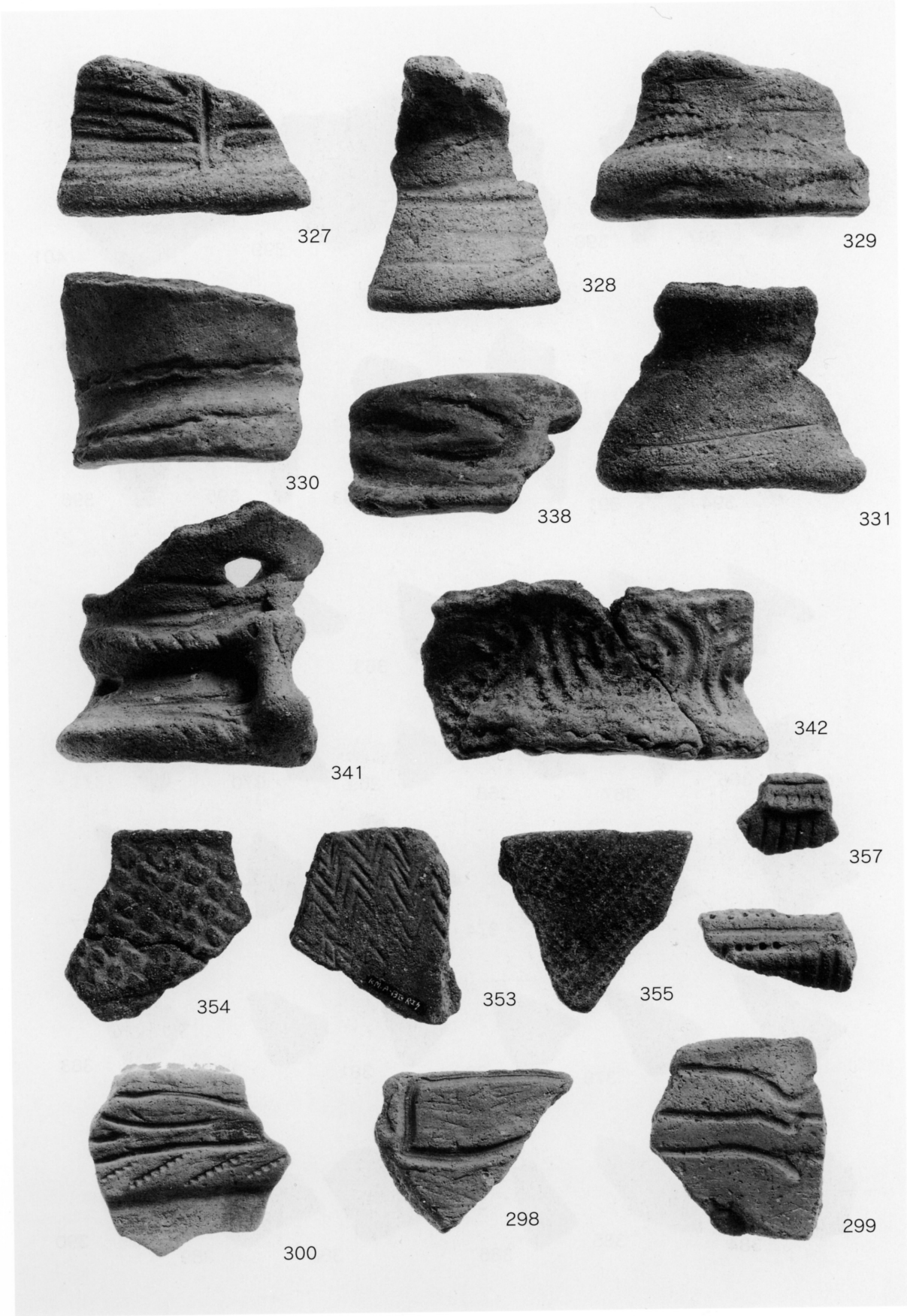


縄文土器11

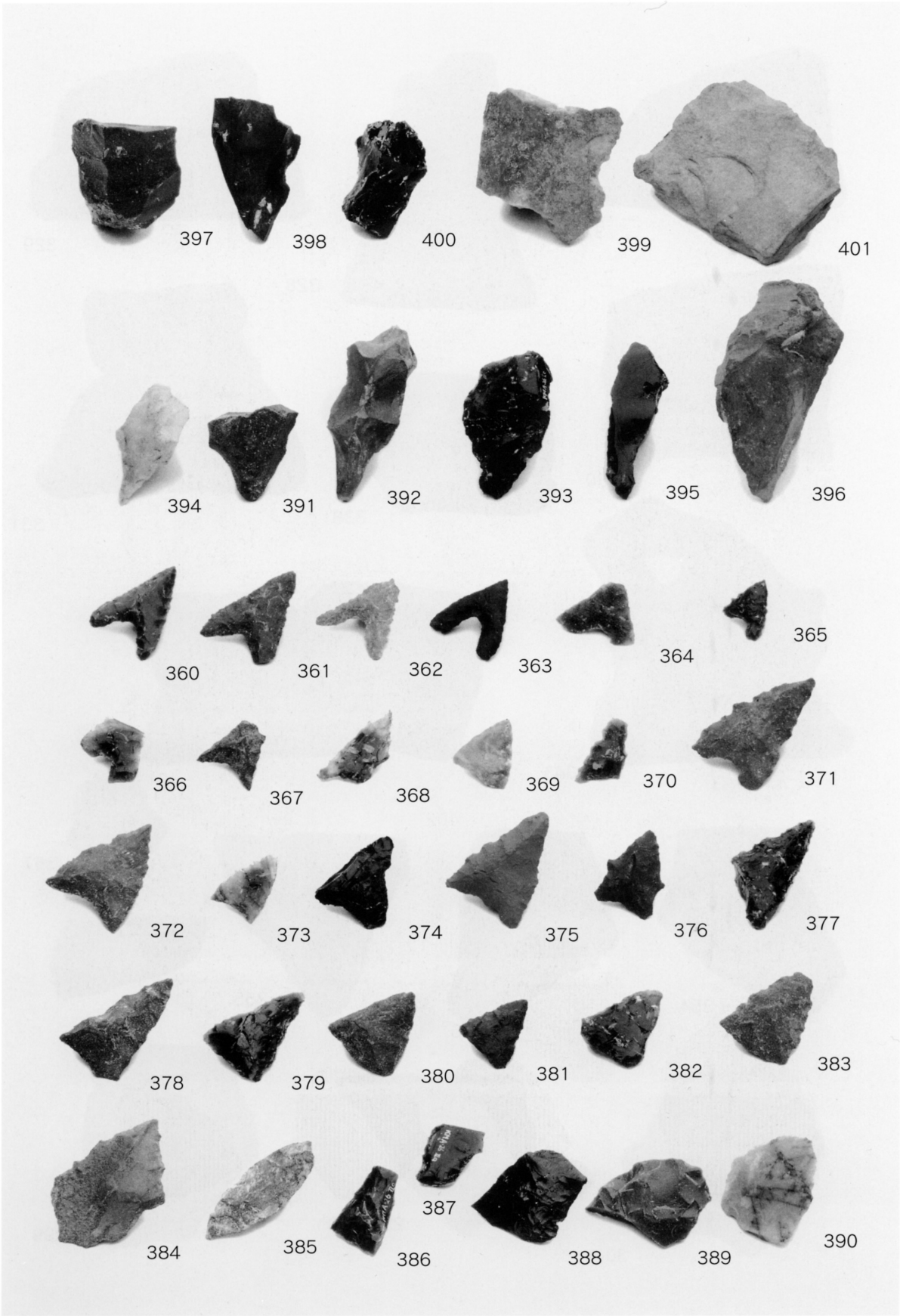
図版24



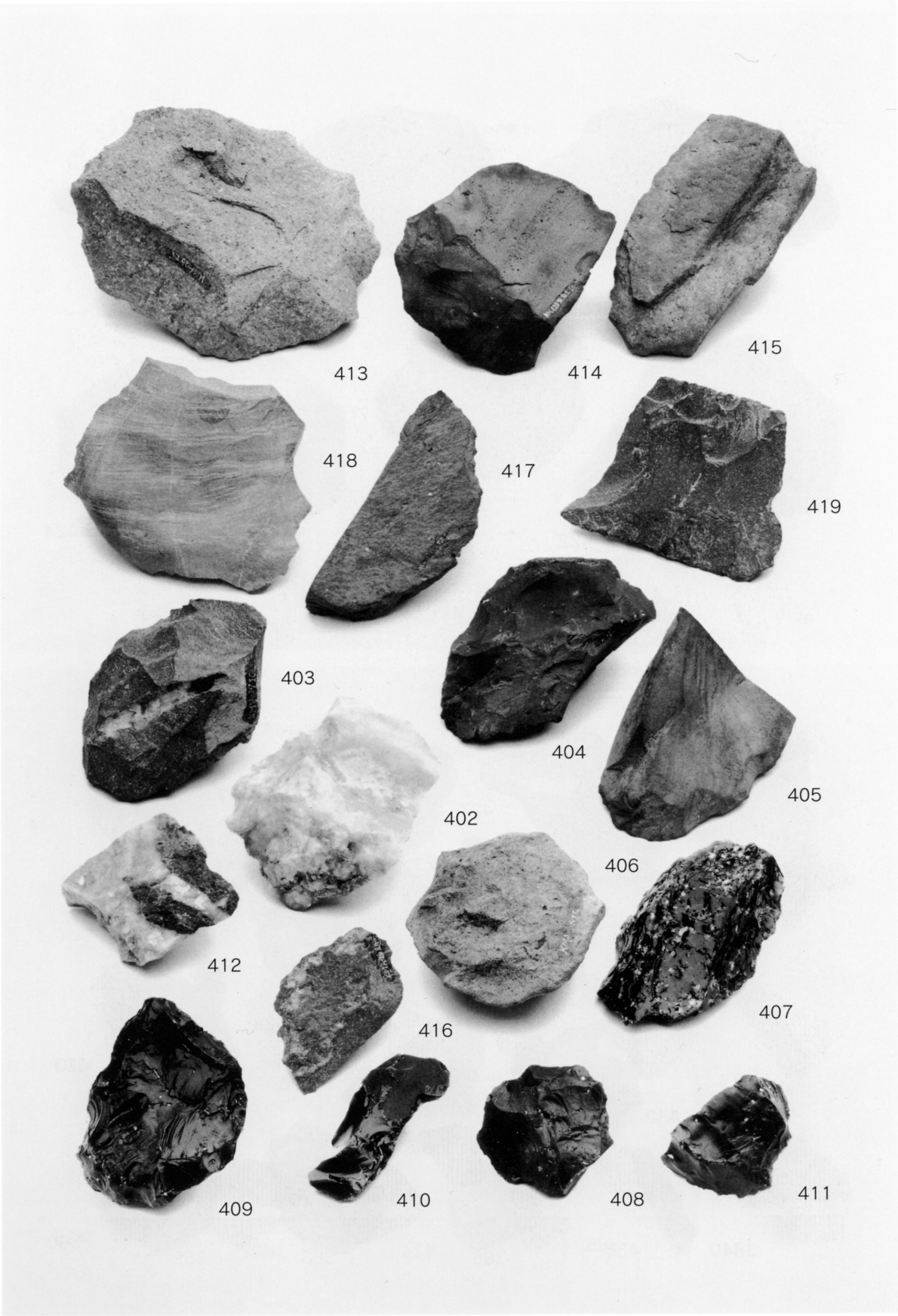
縄文土器12



縄文土器13

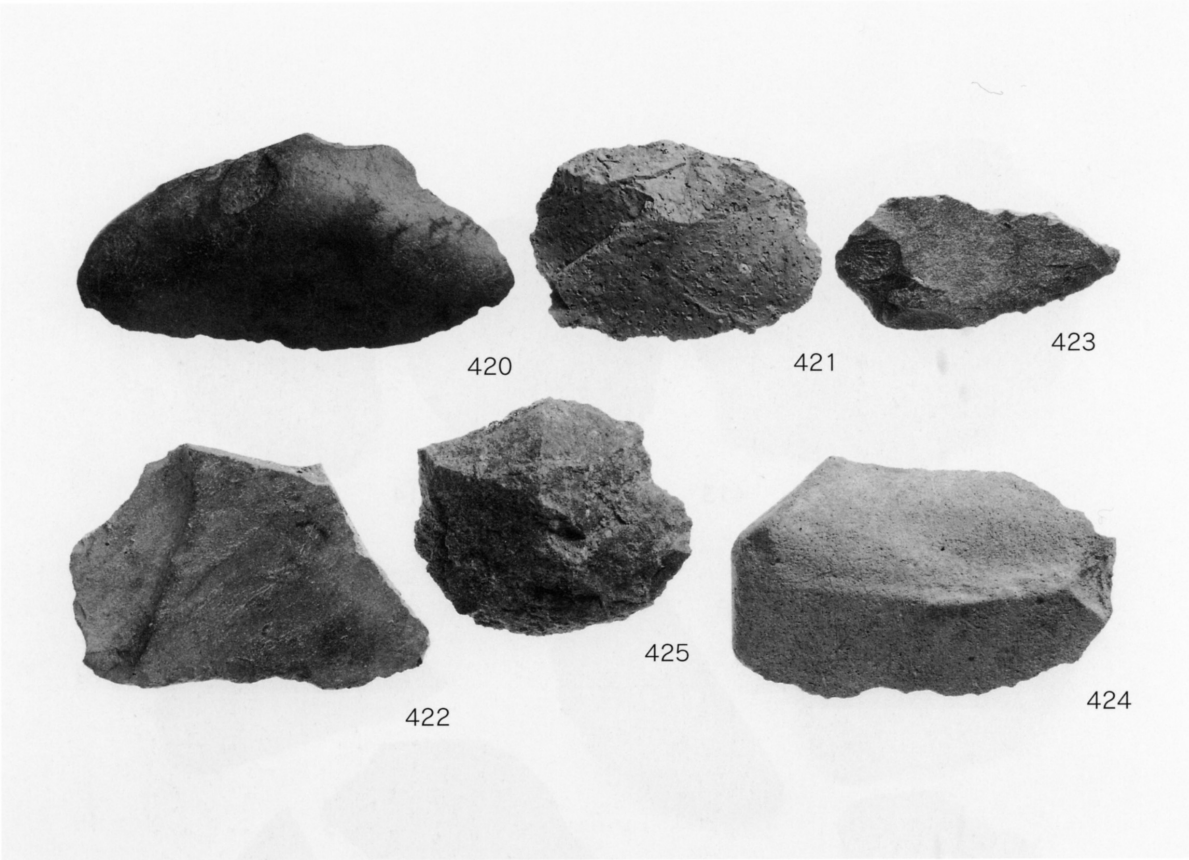

397
398
400
399
401
394
391
392
393
395
396
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390

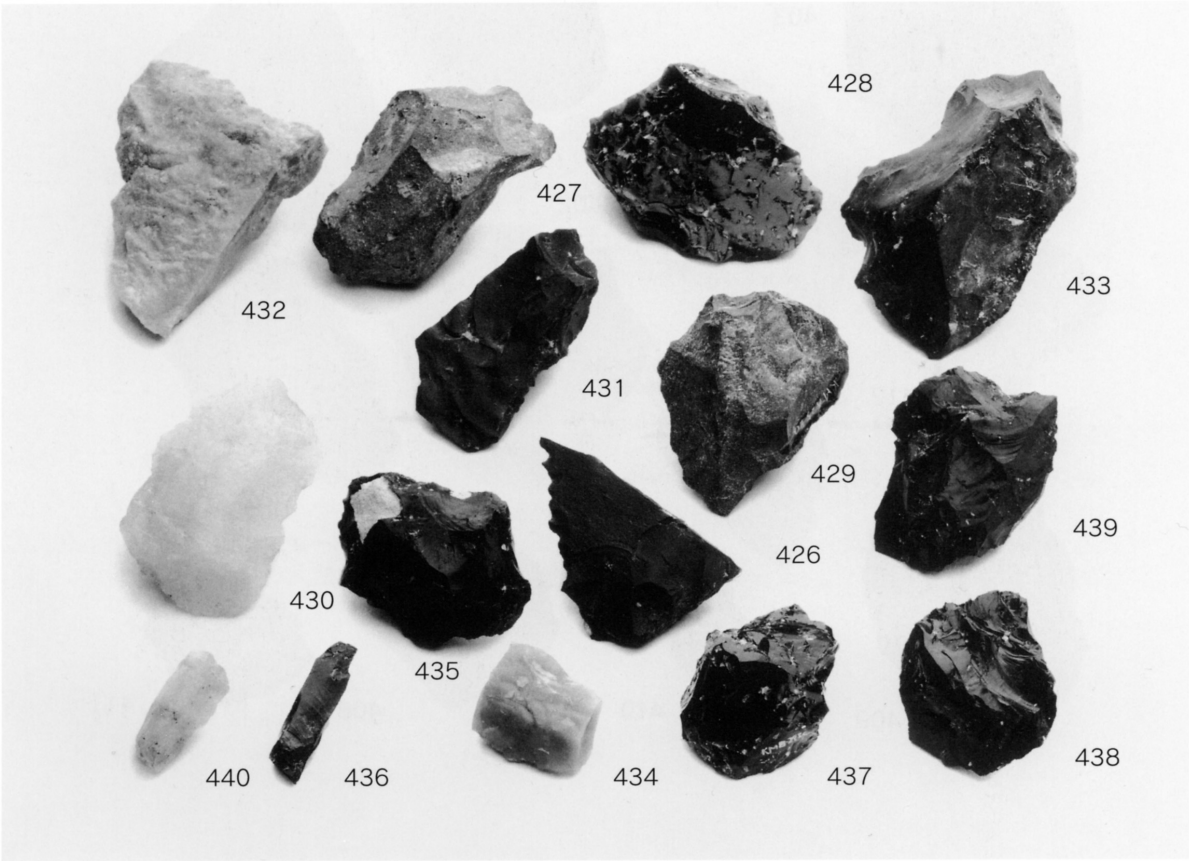
出土石器 1


413
414
415
418
417
419
403
404
405
402
406
412
407
416
409
410
408
411

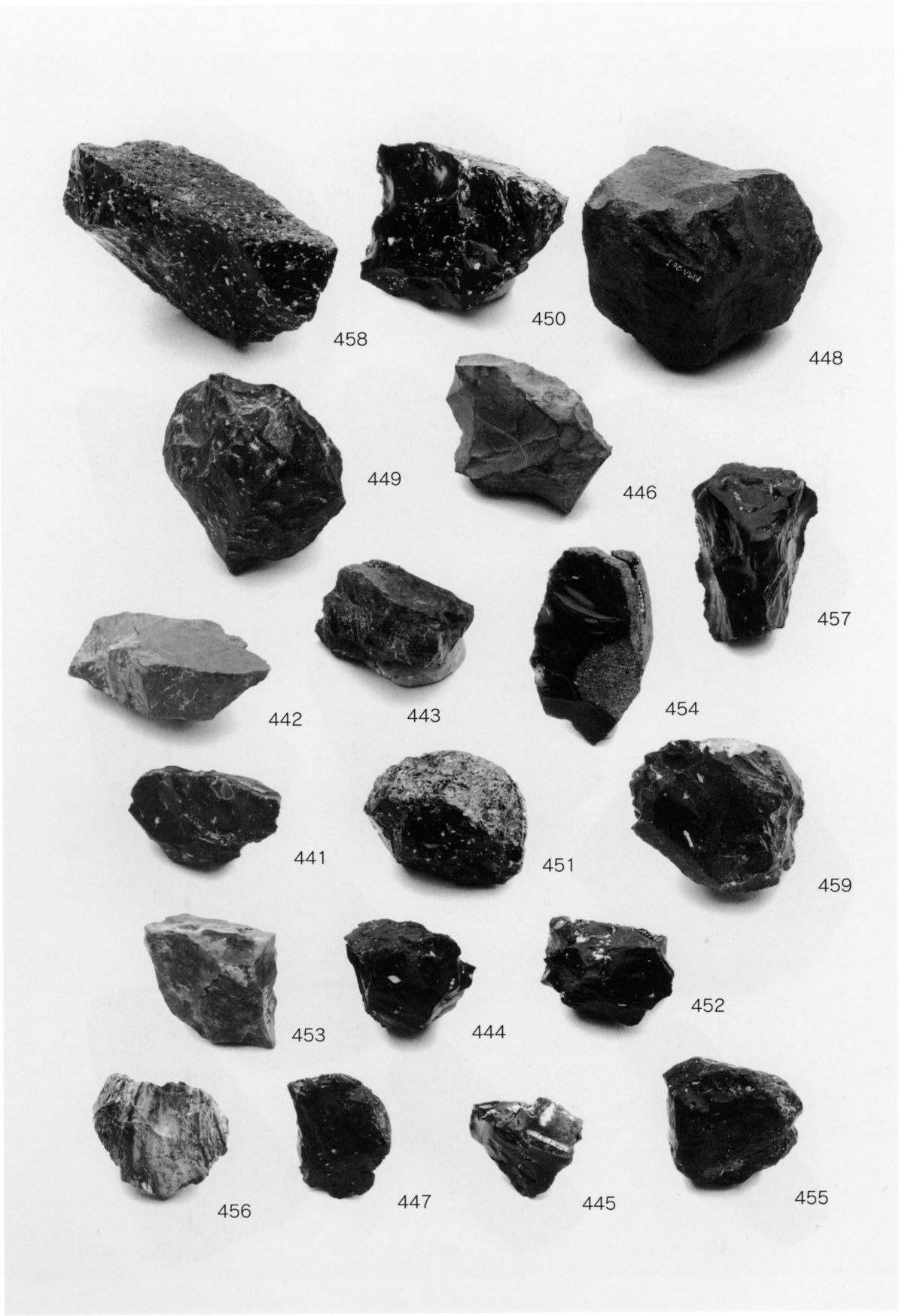
出土石器 2

図版28

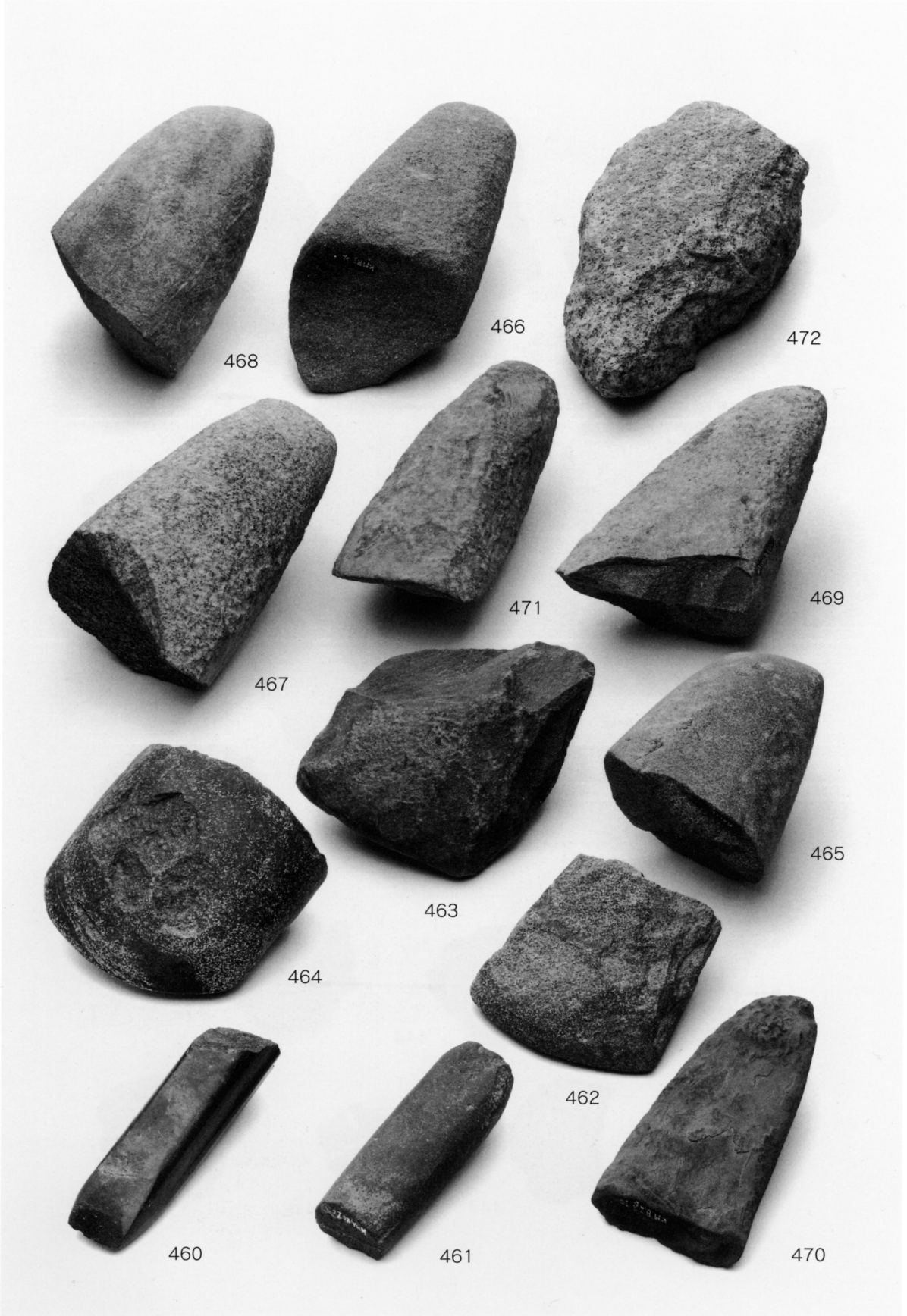

420
421
423
422
425
424


428
427
432
433
431
429
439
430
426
435
440
436
434
437
438

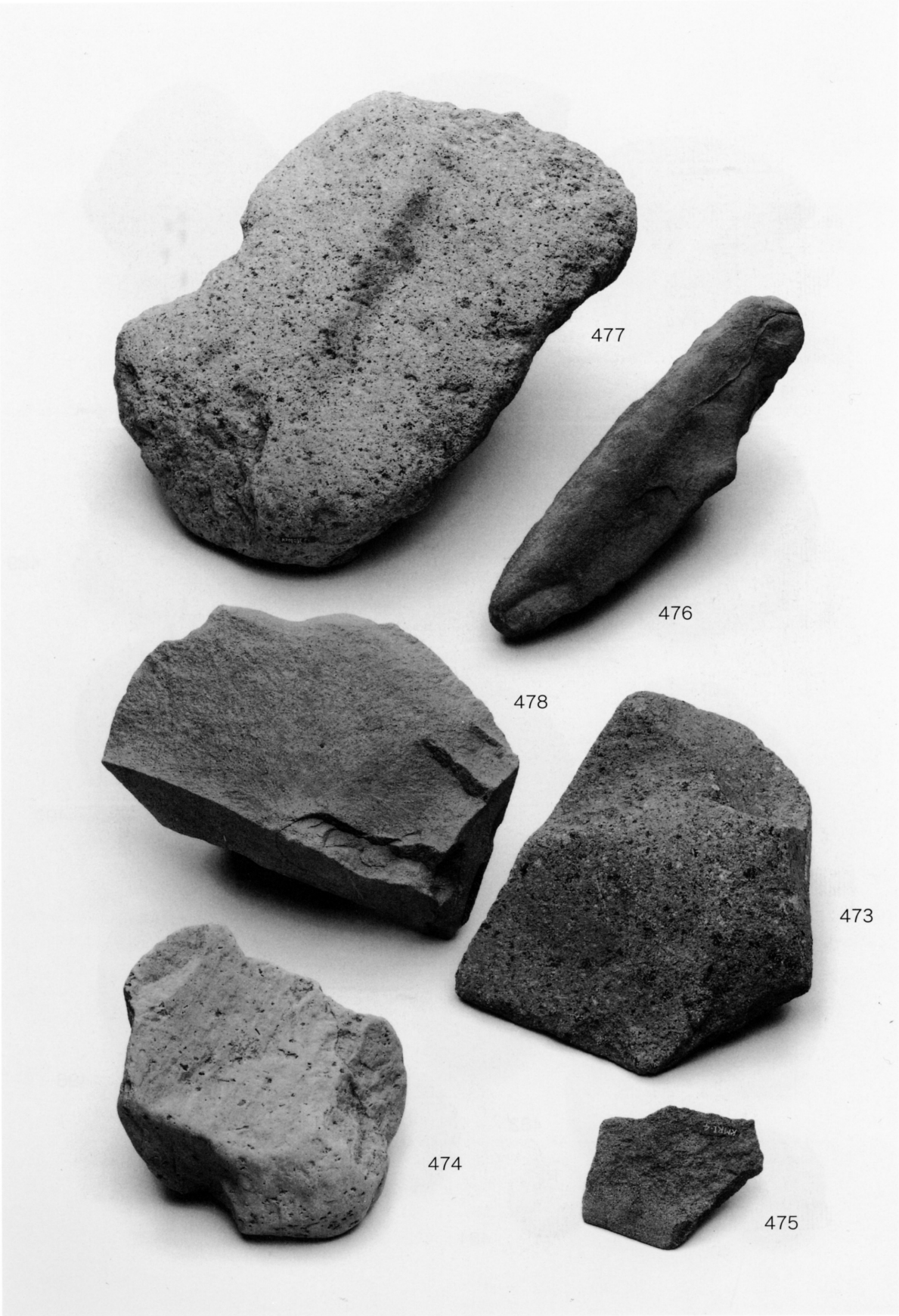
出土石器 3


458
450
448
449
446
457
442
443
454
441
451
459
453
444
452
456
447
445
455

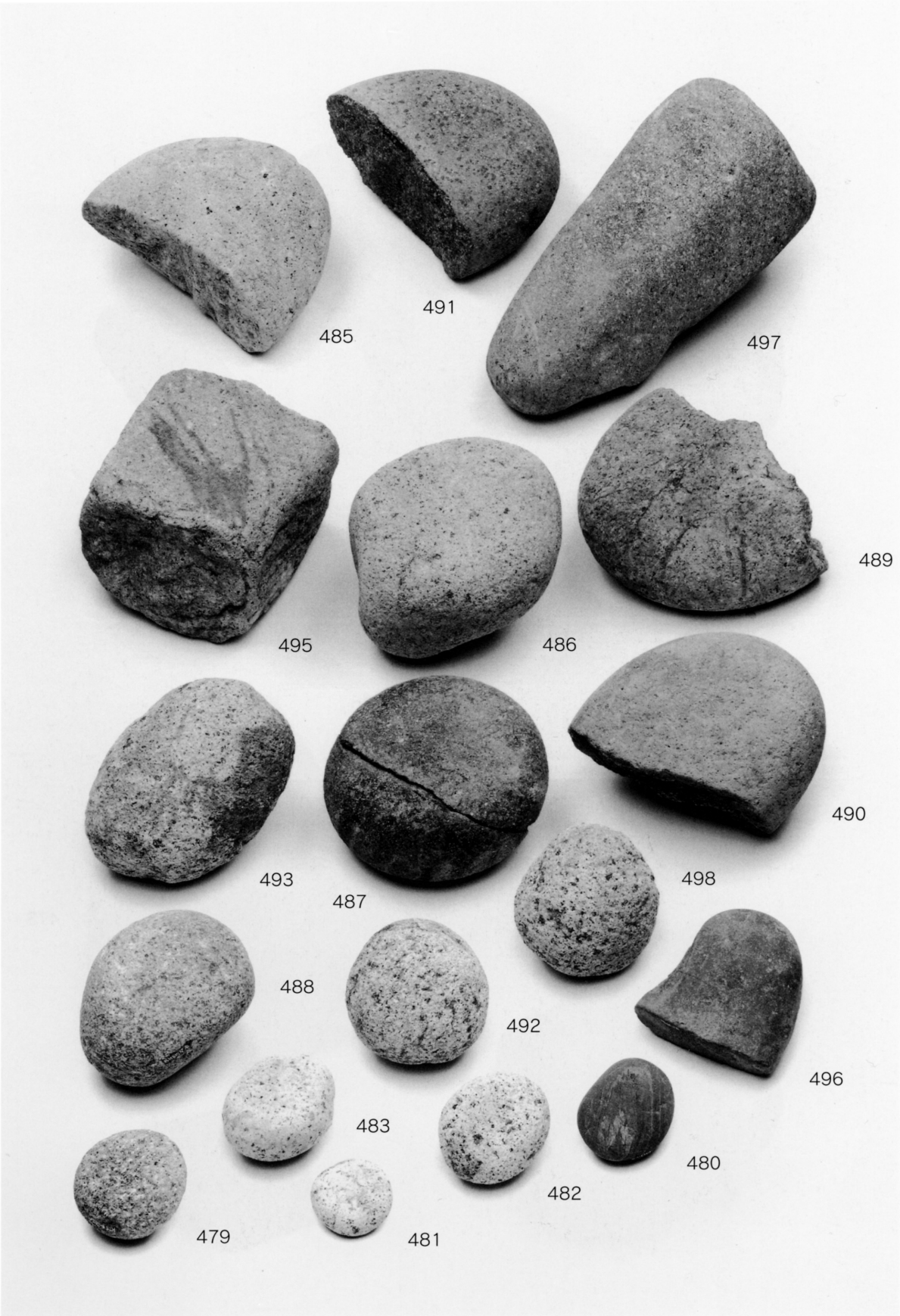
出土石器 4



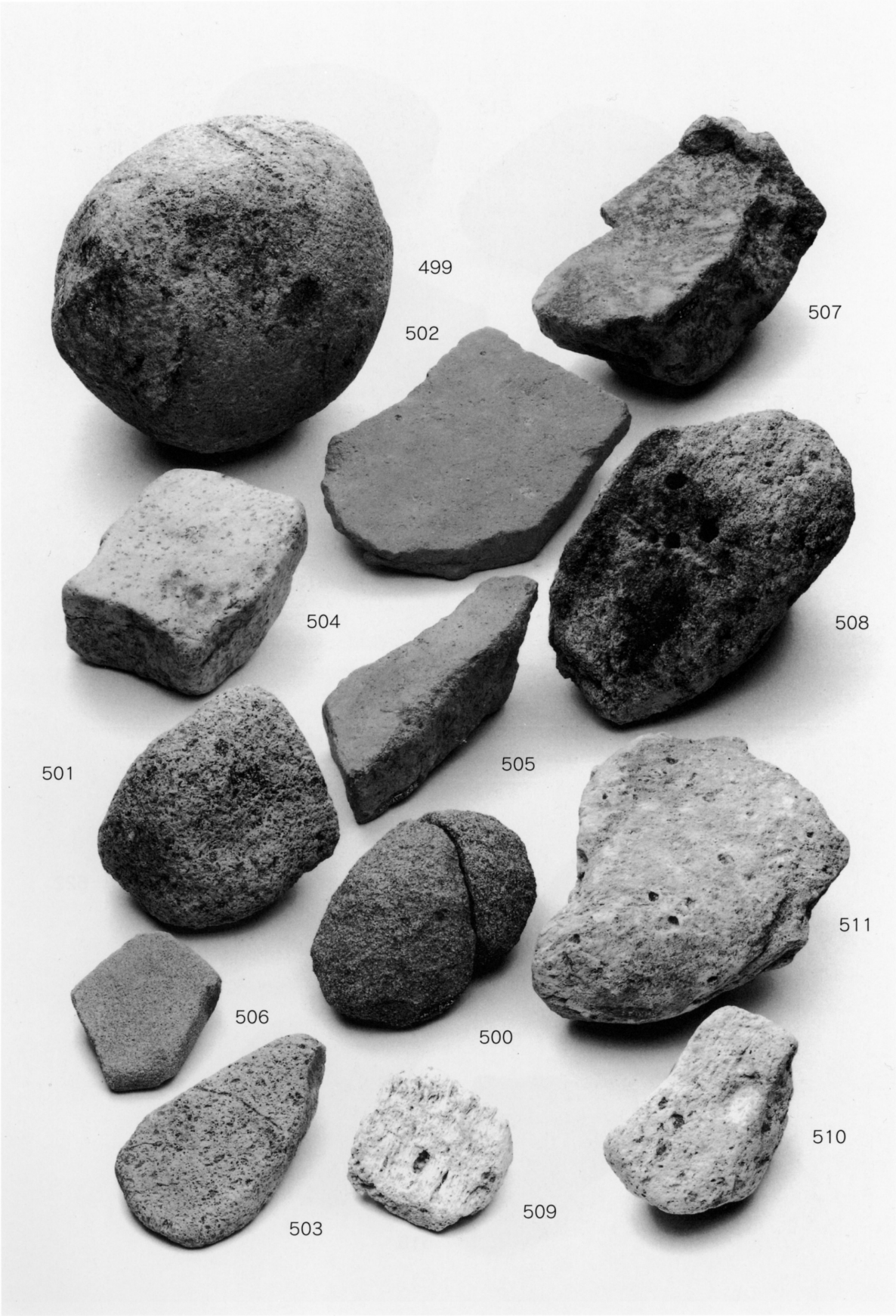
出土石器 5



出土石器 6

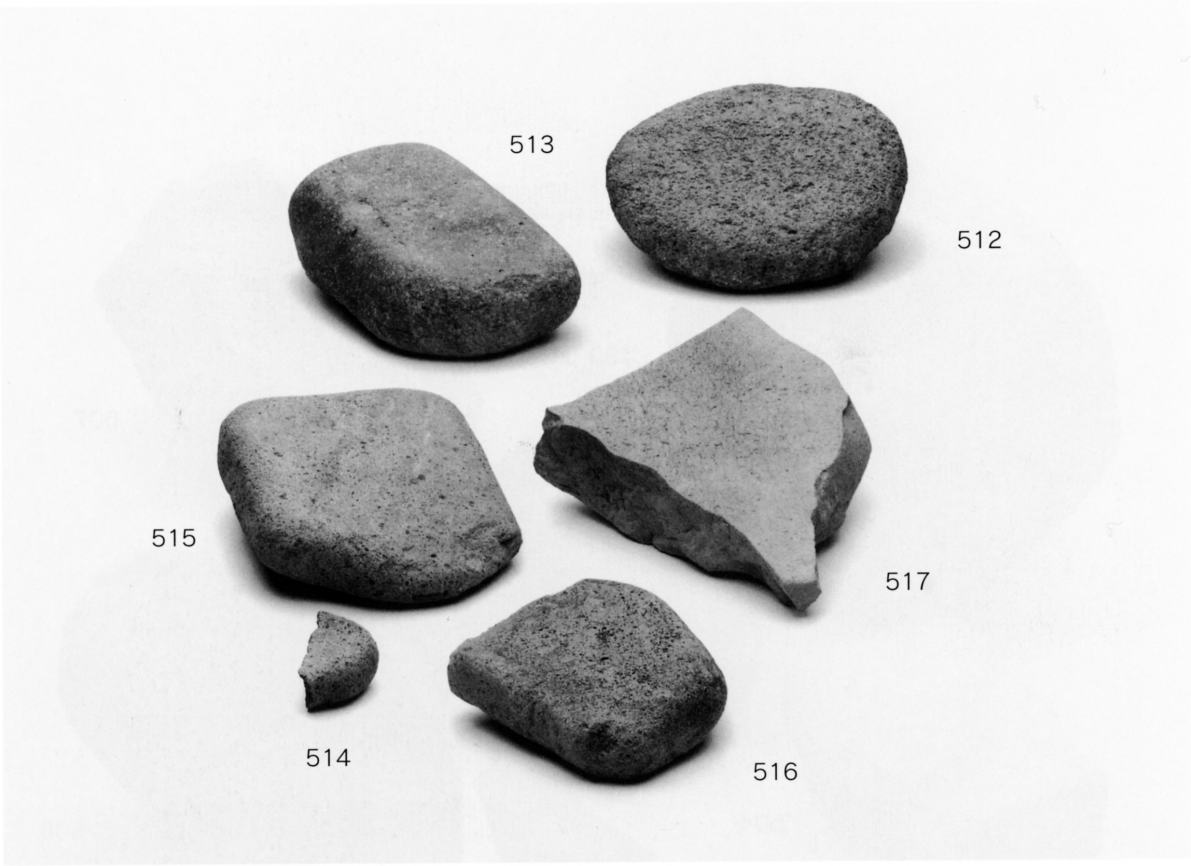

485
491
497
495
486
489
493
487
490
498
488
492
496
483
480
482
479
481

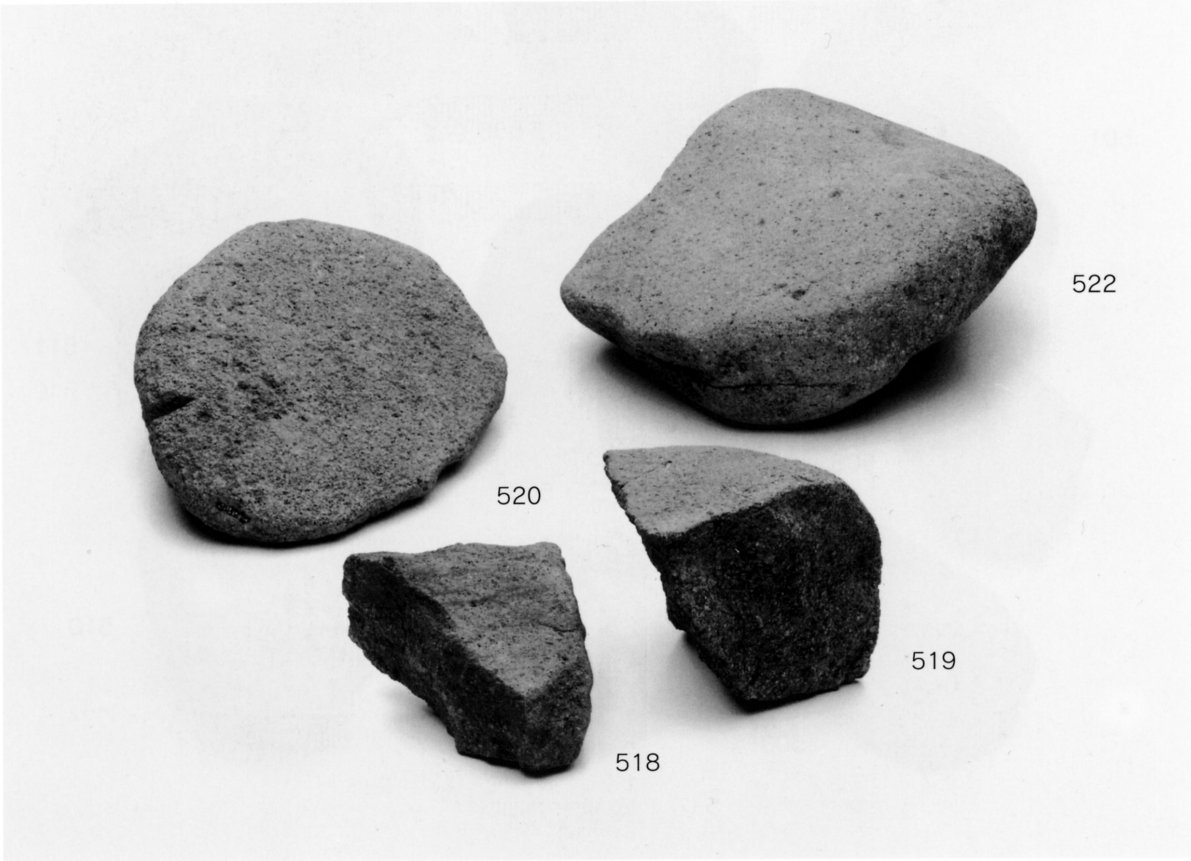
出土石器 7



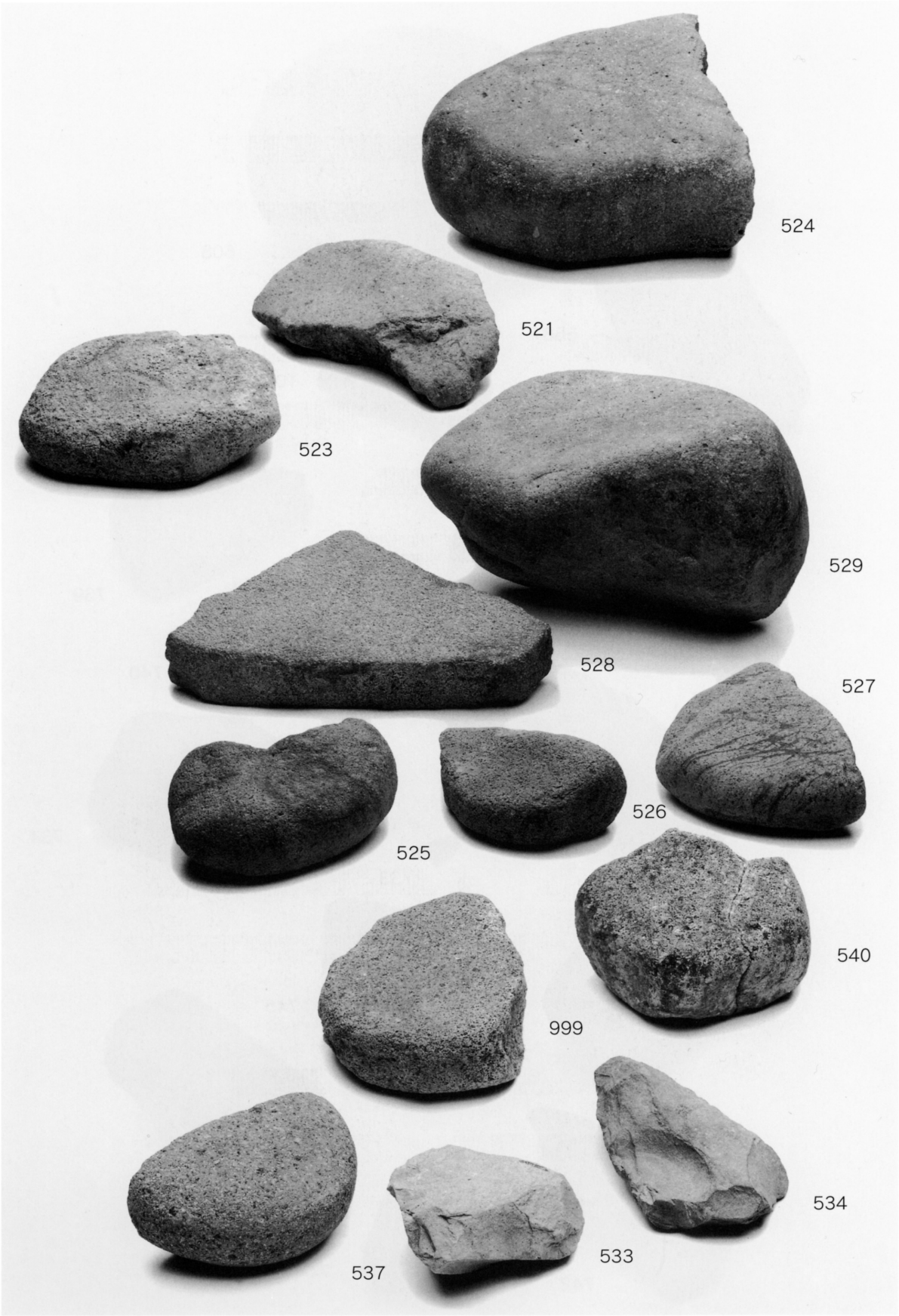
出土石器 8

図版34



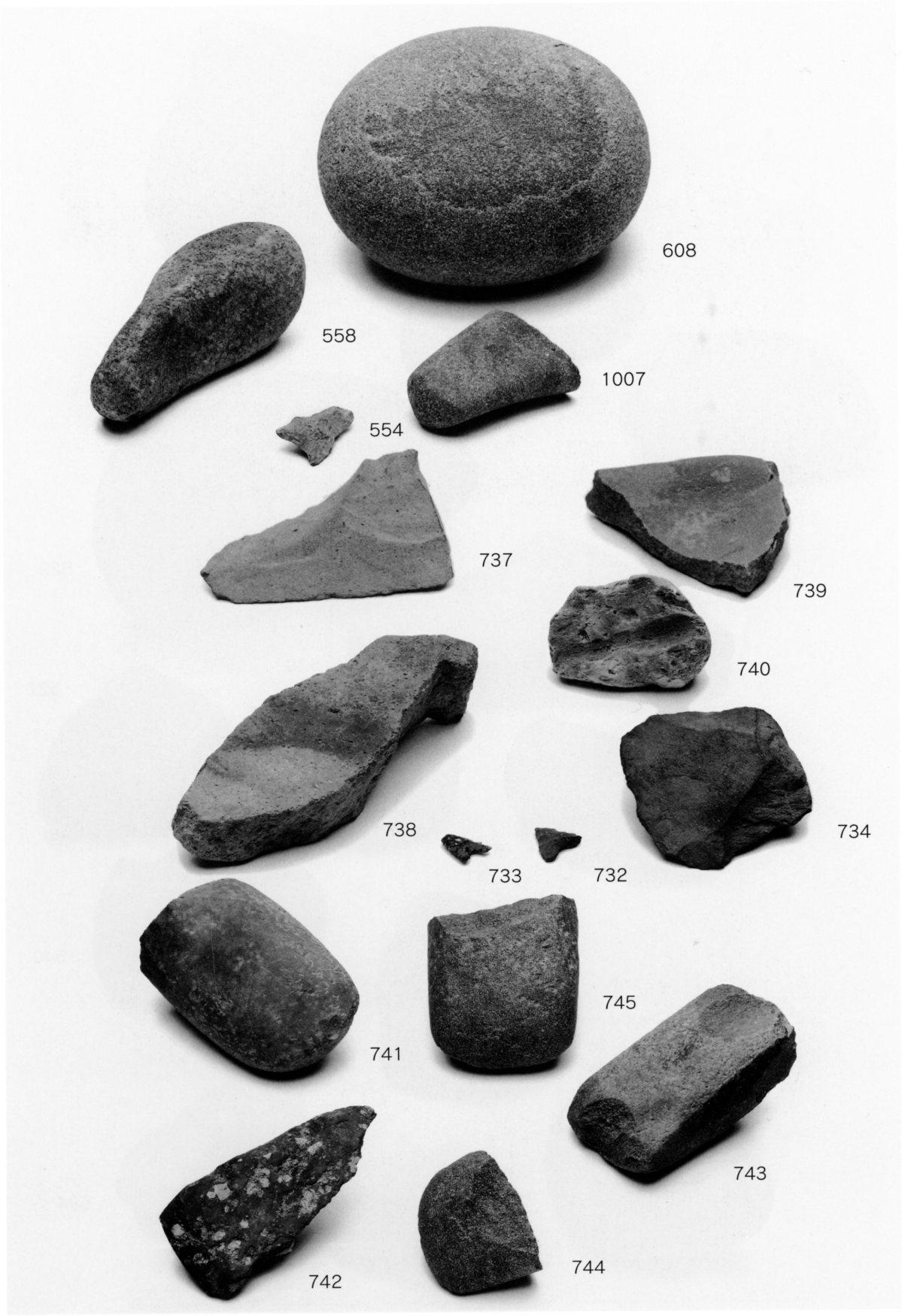


出土石器 9

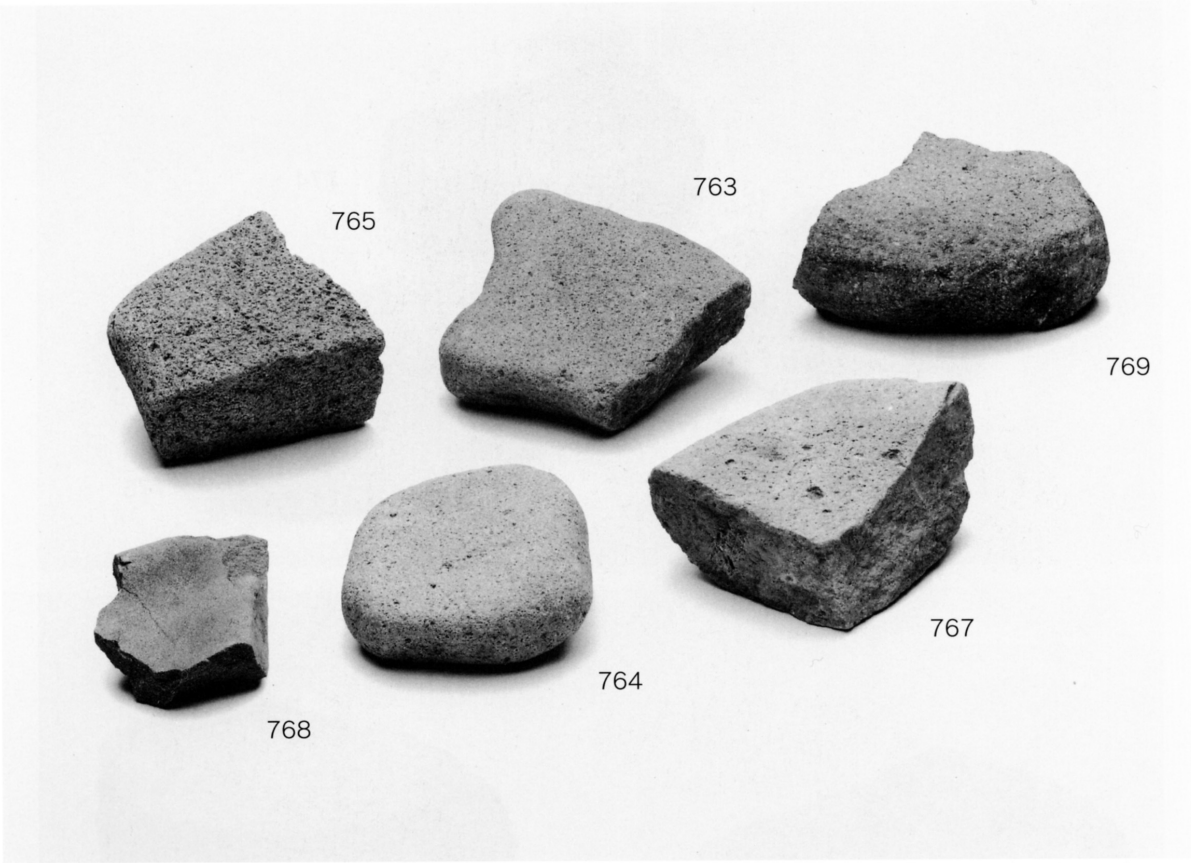


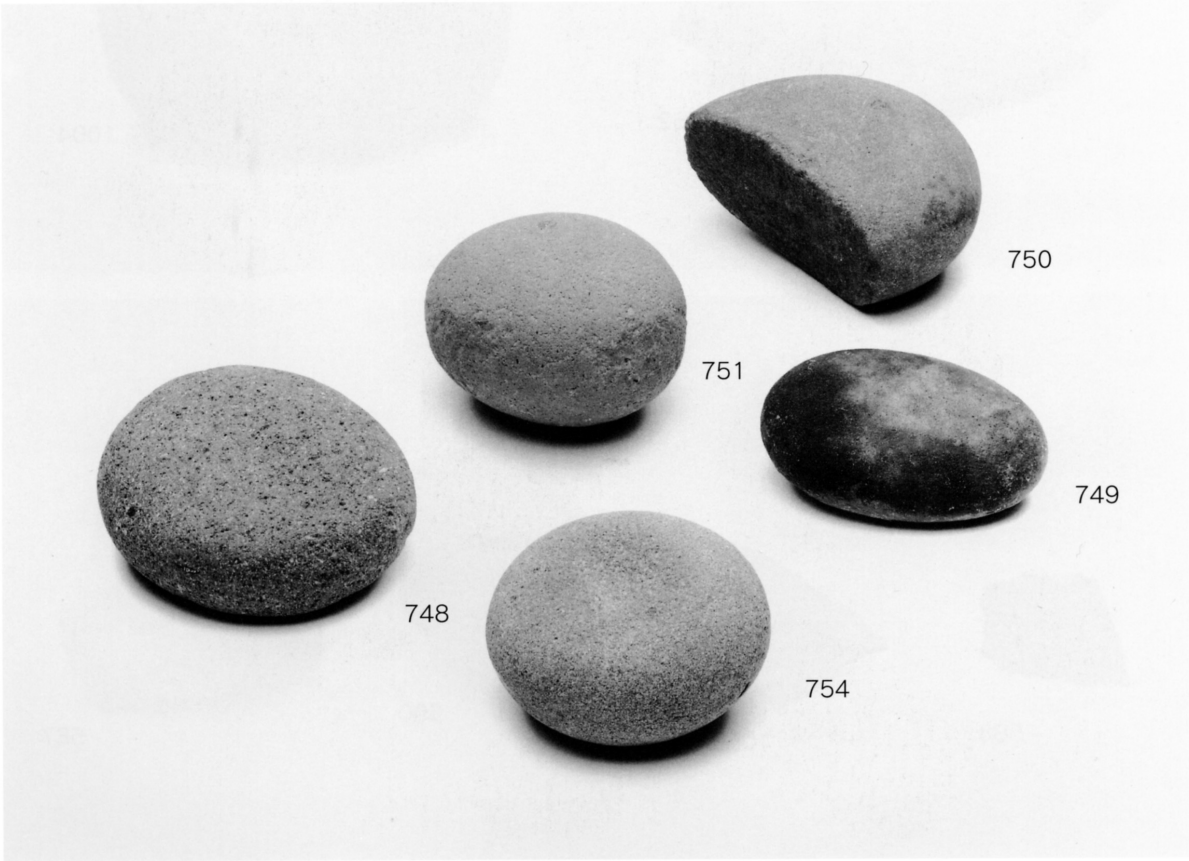
出土石器10

図版36



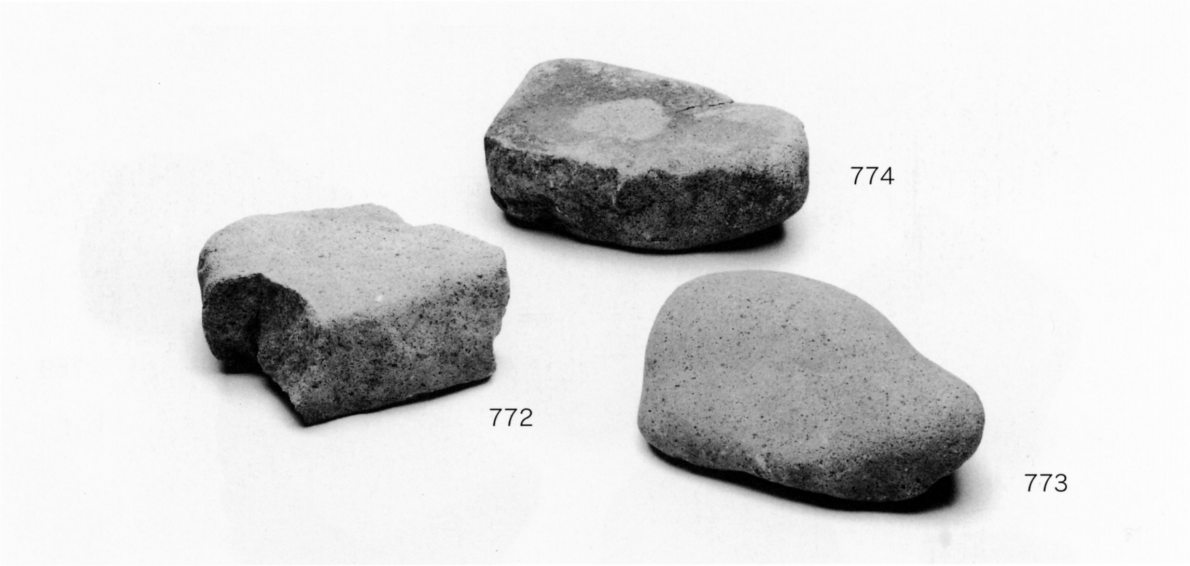
出土石器11

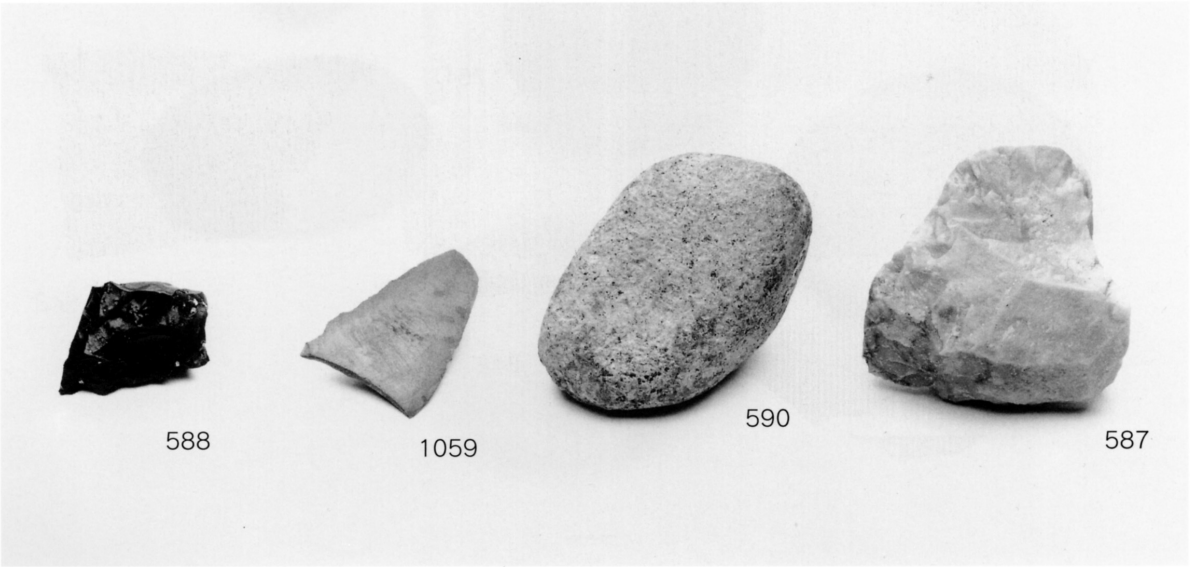




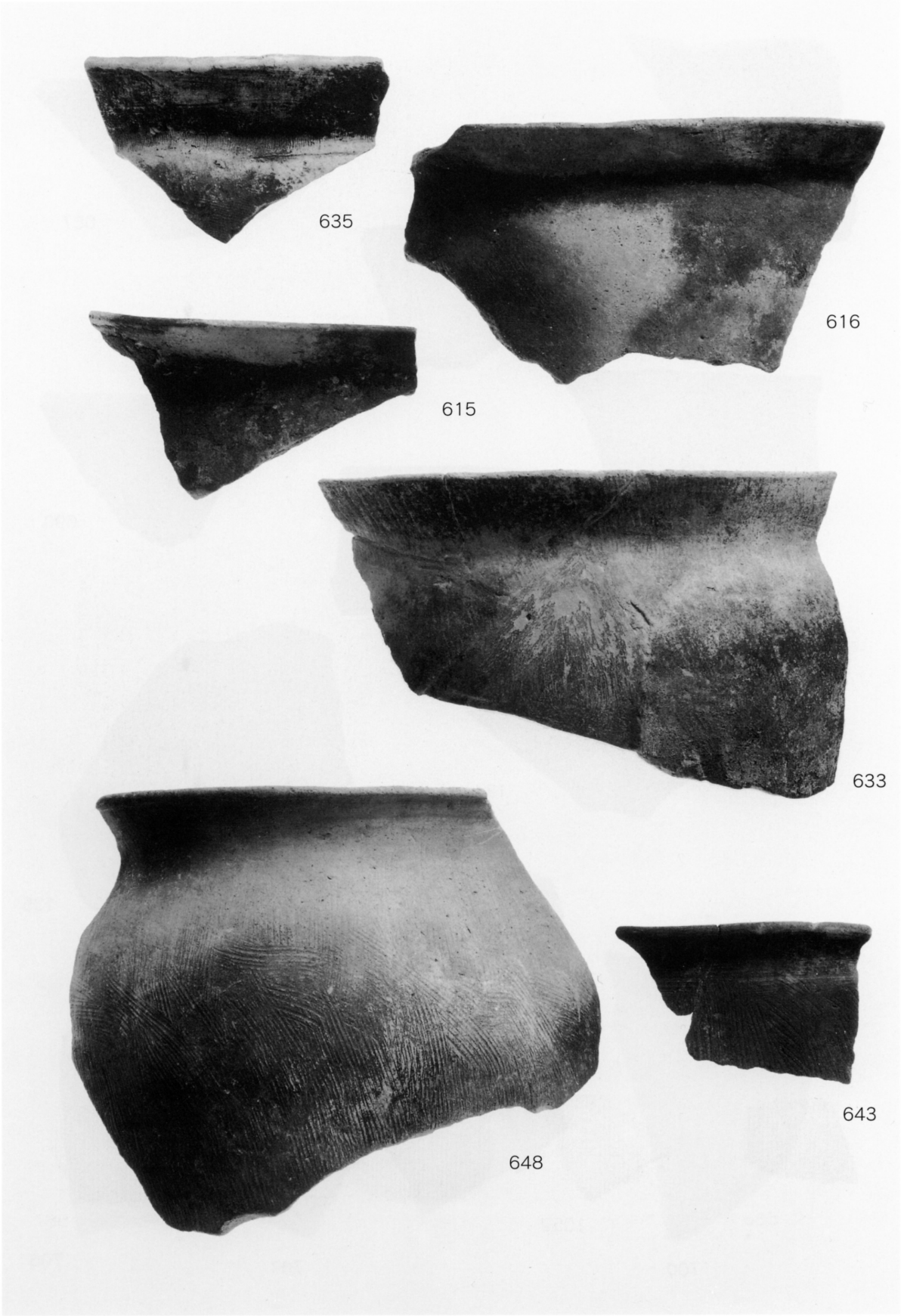
出土石器12

図版38



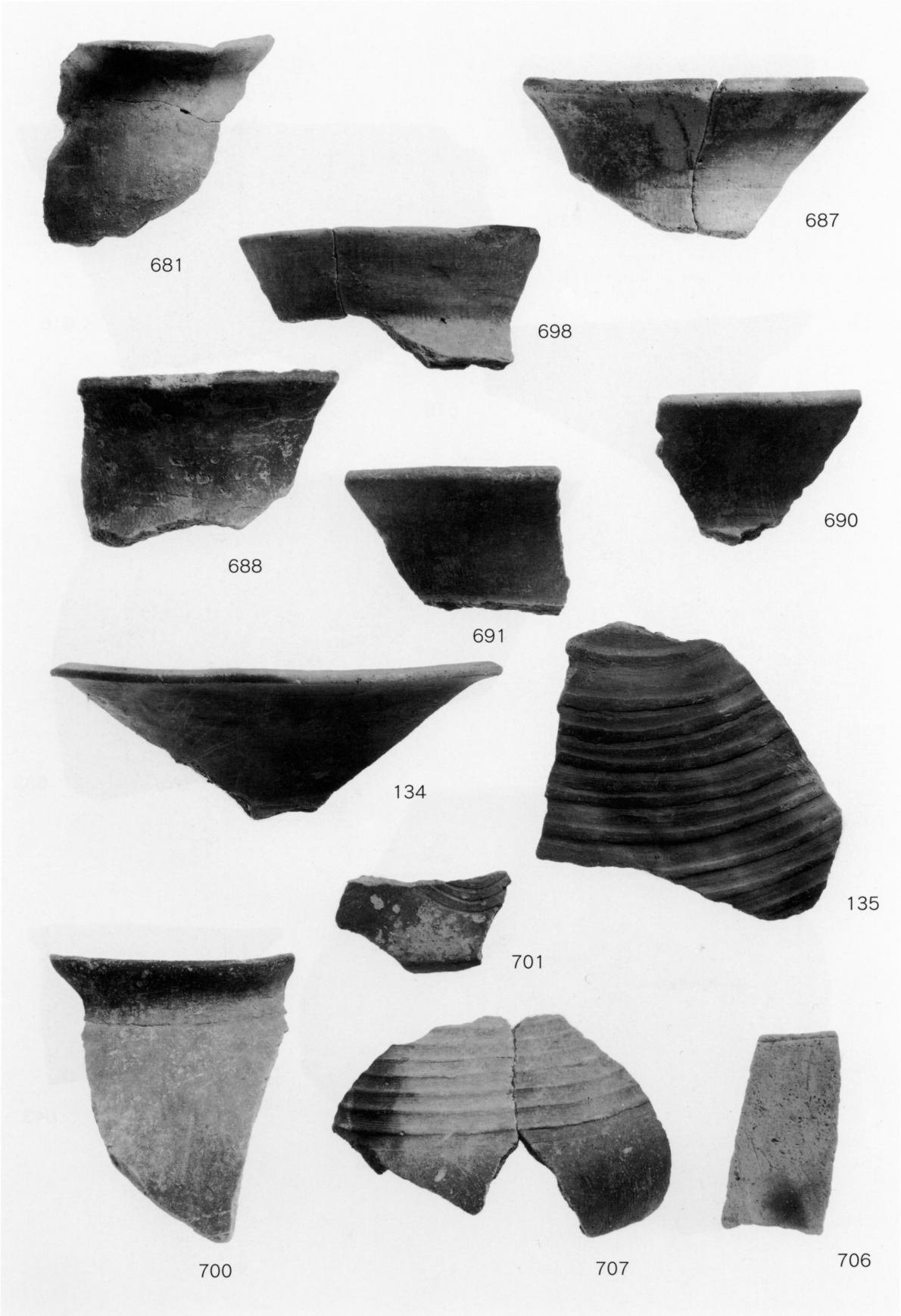


出土石器13



自然流路１甕

図版40



自然流路１壺

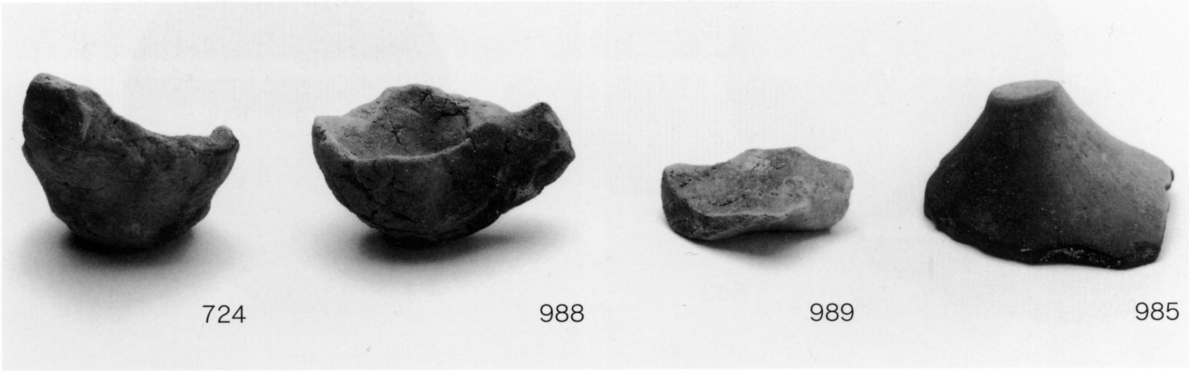
自然流路１・溝状遺構２出土土器（甕・壺）

図版42

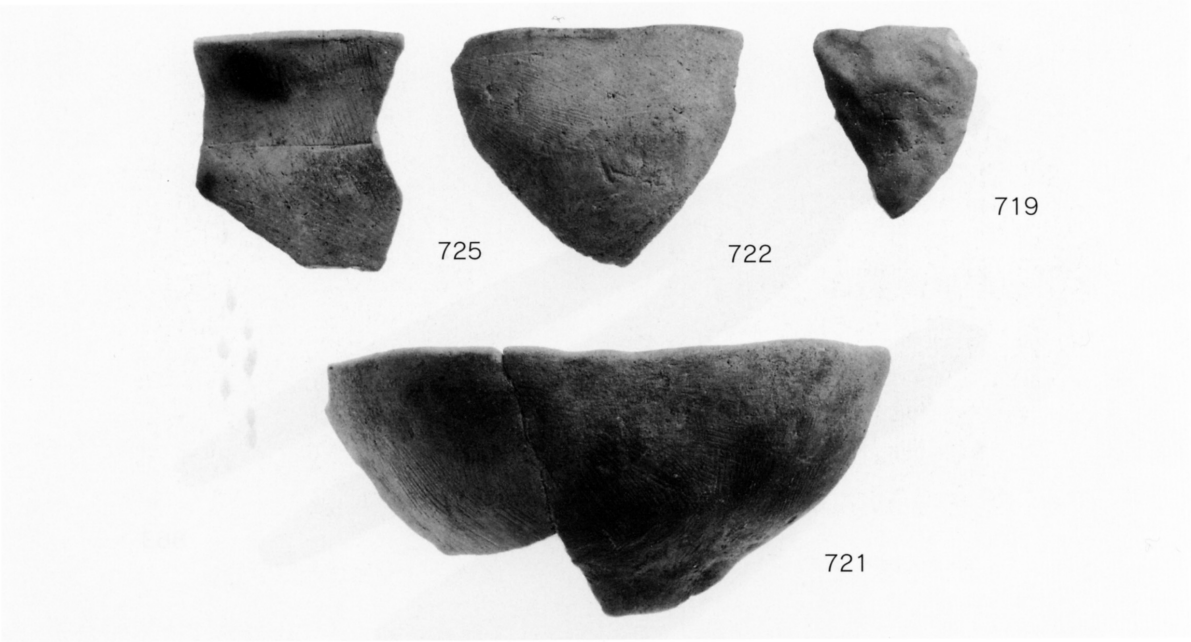
溝状遺構２壺

自然流路２壺

溝状遺構２小型丸底壺



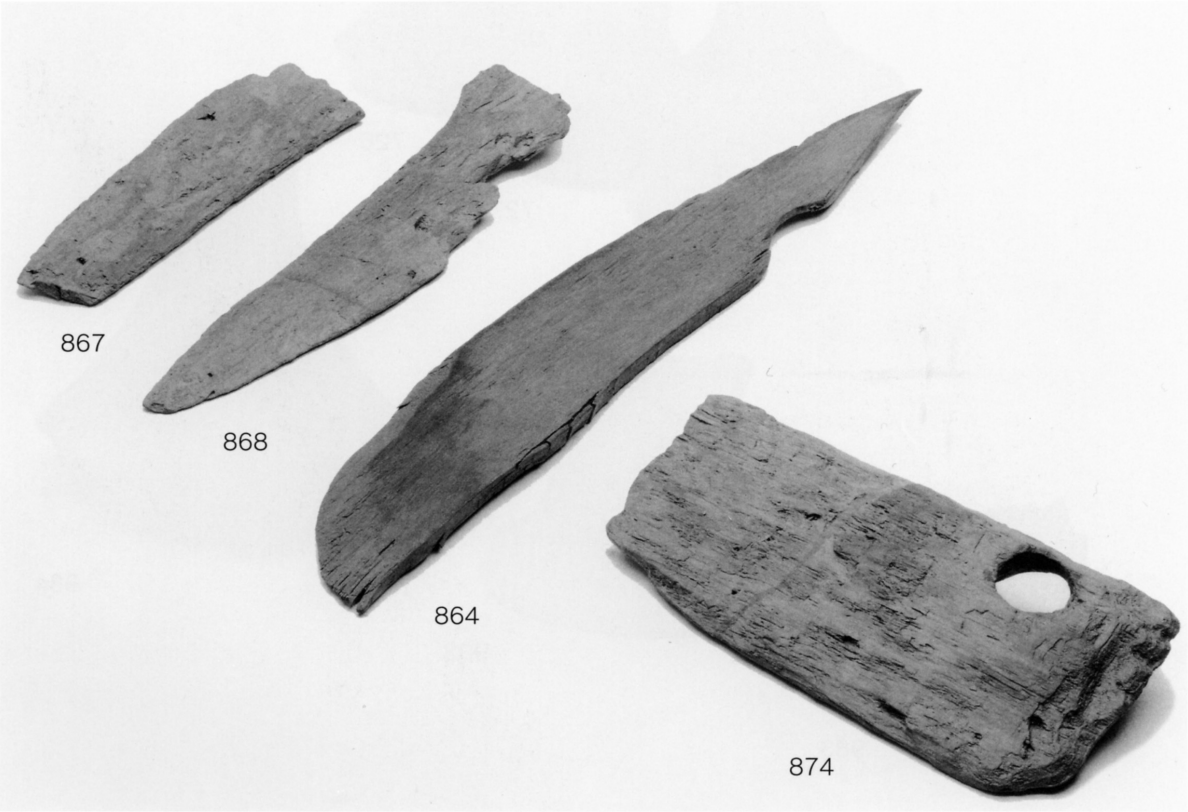
自然流路１・溝状遺構２出土土器（匙状土製品他）



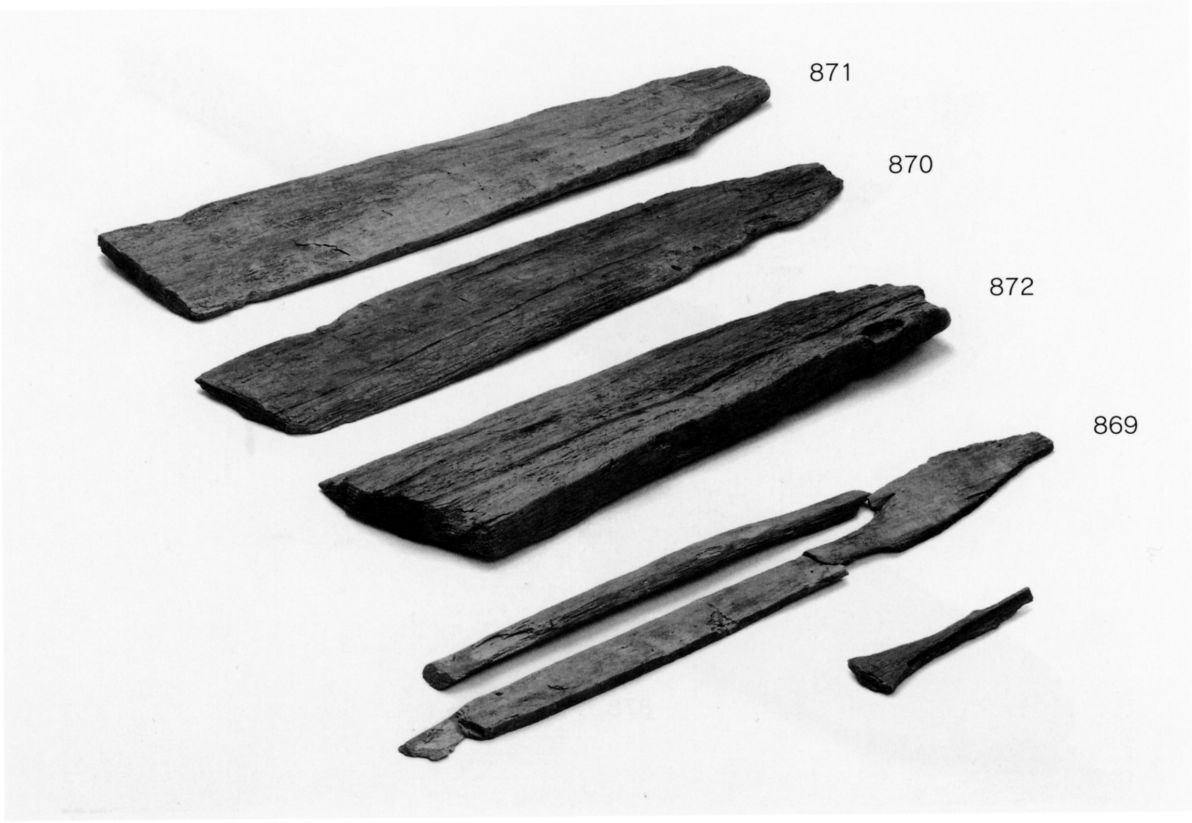
自然流路１・溝状遺構２出土土器（鉢・高坏）

図版44

曲柄鍬



曲柄鍬・横鍬

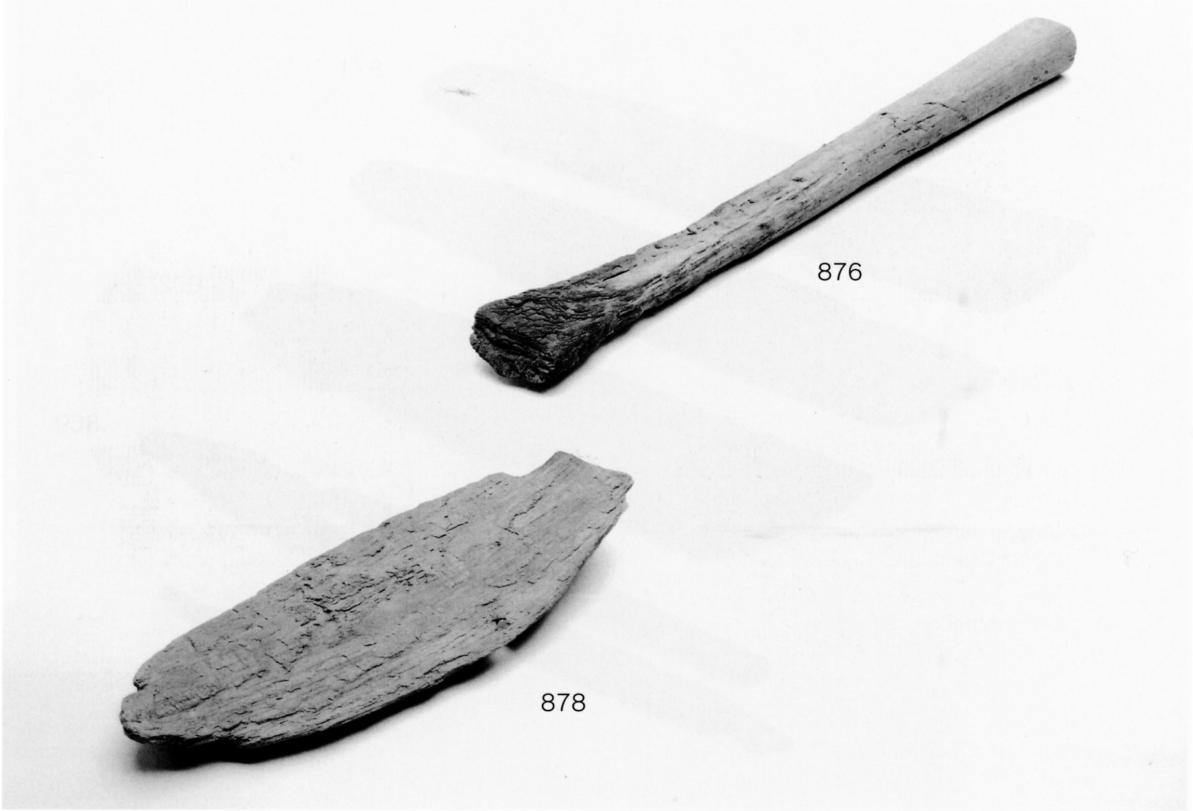


農具未製品

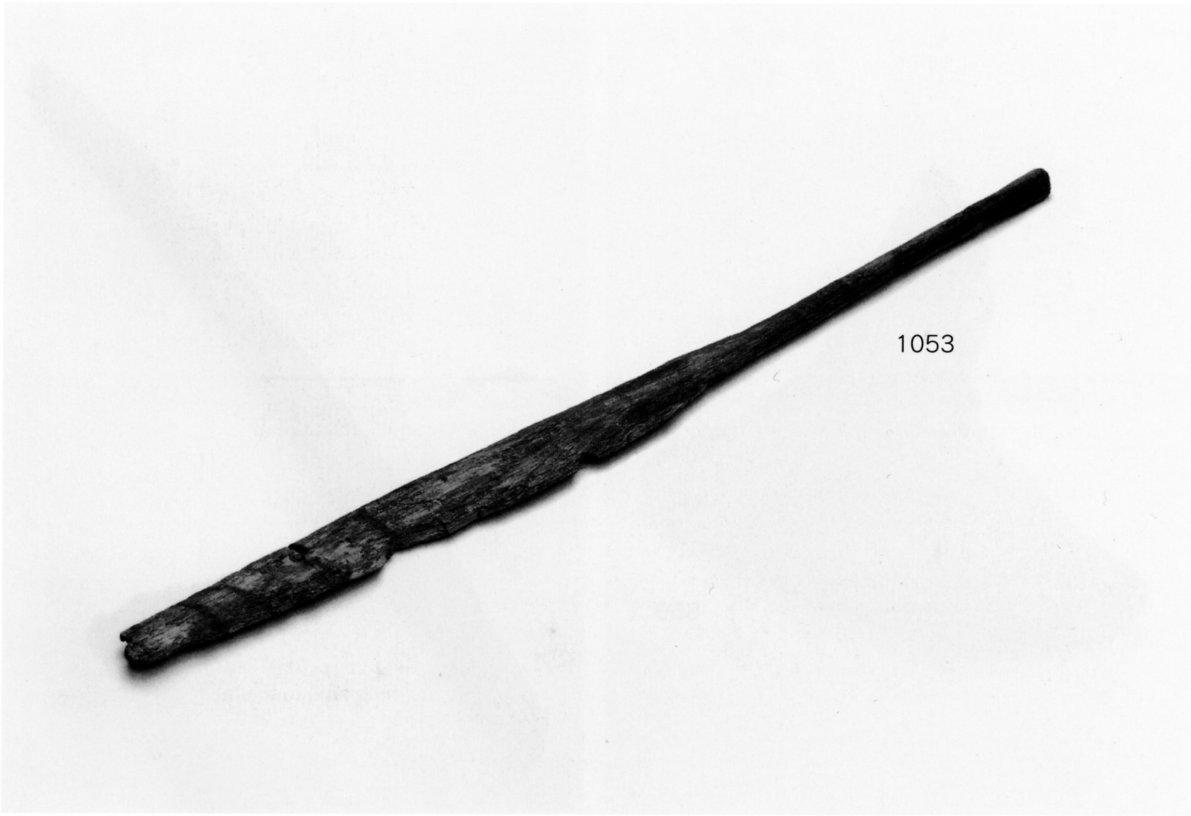
鍬の柄

丸木弓

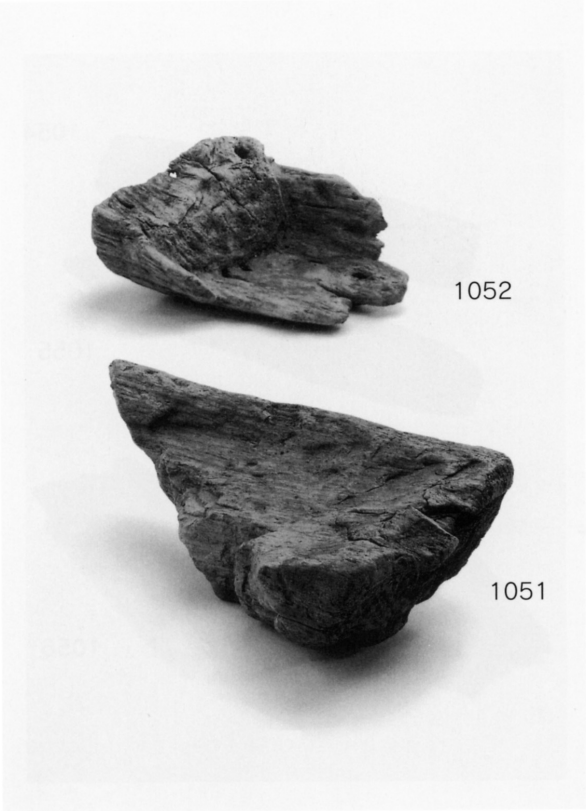
図版46



掘り棒



用途不明木製品

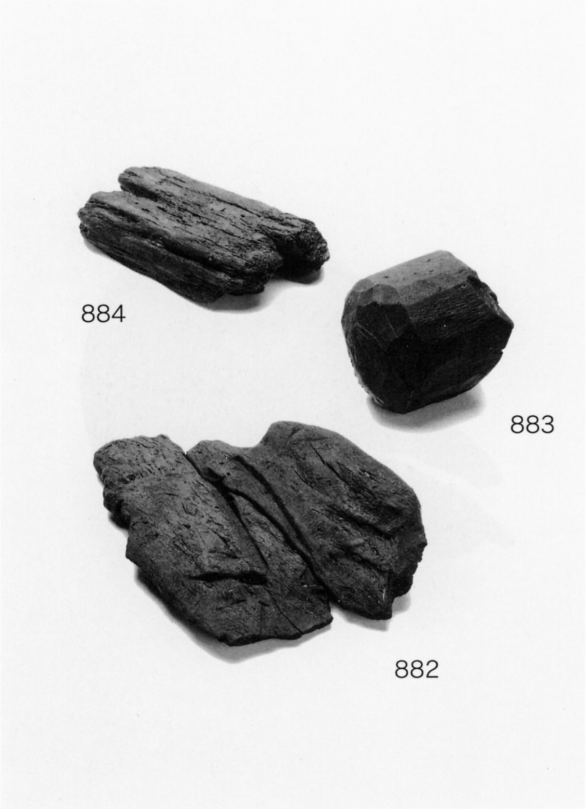


容　器

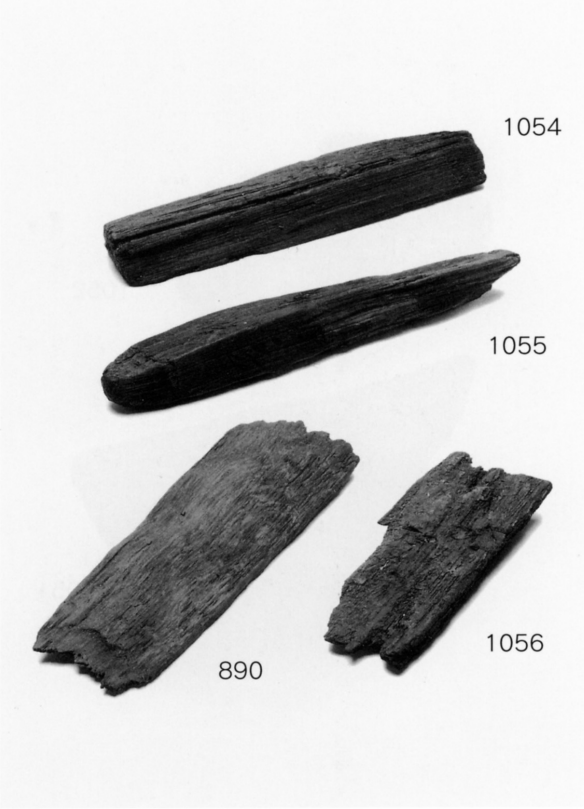
ひょうたん

建築材・用途不明木製品

図版48



用途不明木製品



建築材の可能性がある木製品

加工のある杭（溝状遺構１）

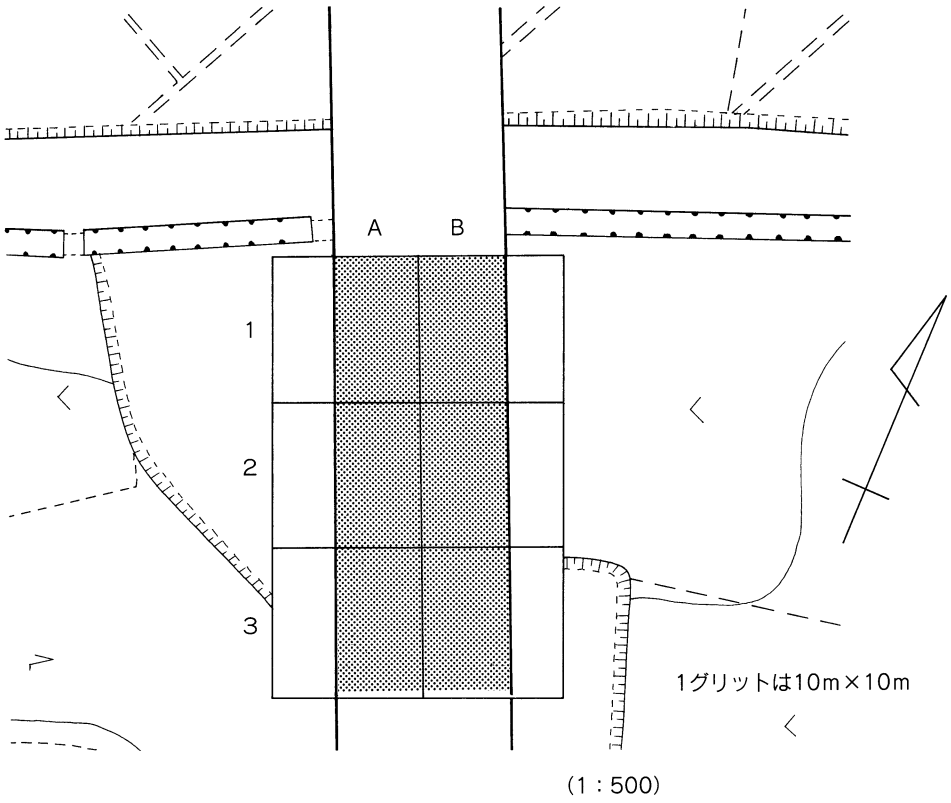
城　下　遺　跡

第１章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の方法

全面調査は，確認トレンチの結果をもとに遺跡の北端を中心に行った。全面調査区の南側に設定した３トレンチでは，中近世の遺物が少量出土したが遺構は検出されなかった。３トレンチの南側はシラス台地の末端部にあたるが，削平を受けているために遺構・遺物は検出されなかったことから，全面調査の範囲を３トレンチより以北を対象とした（第２図）。また，確認調査の結果をもとに，基本土層Ⅱ層とⅢ層を調査対象とした。Ⅲ層より下層は無遺物層である。

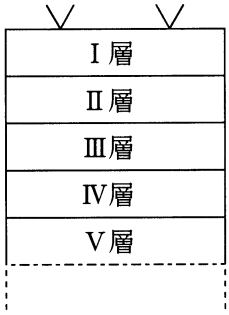
全面調査にあたっては，工事用の杭を基準として調査区に10m×10mのグリッドを設定し，北西隅を起点に南に向かって１～３，東に向かってＡ～Ｂとそれぞれグリッド名を付して遺物の取り上げを行った（第1図）。発掘調査は表土を重機で取り除いた後，遺物包含層を人力で掘り下げ各層ごとに遺物を取り上げた。基本土層のⅡ層とⅢ層，谷部の傾斜面に堆積した①層～⑩層から古代～近世にかけての遺物が出土した(第３図)。遺物の出土状況は，各時代の遺物が各層から混在した状態で出土した。平成10年度の確認調査で溝状遺構の可能性がある落ち込みが報告されていたので，包含層を掘り下げた後，Ⅳ層上面で遺構検出を行った。調査の結果，遺構は検出されず，自然地形の落込みであることが判明した。出土遺物はパンケース15箱分であった。



第１図　グリッド配置図（1/500）

第２節　遺跡の層位

表土を含めて５層に分層でき，II層とⅢ層が古代から近世にかけての遺物包含層である。II層とⅢ層の土質は大きな違いはなく，鉄分や軽石の量がわずかに違うだけである。Ⅳ層は遺跡後方の台地より供給されたシラスの２次堆積土でⅤ層は砂礫層となる。基本土層は調査区の東側の平坦面にのみ観察することができ，調査区の中でも谷部に傾斜していく西側では落ち込みに沿って基本土層にはみられない粘質土が堆積している（第３図）。谷部の包含層からは，古代～近世にかけての遺物が混在した状態で出土している。



Ⅰ　層　表土（褐色砂質土）厚さ 約 20 ㎝。
Ⅱ　層　暗褐色粘質土　鉄分を多く含む。古代～近世の遺物包含層。
Ⅲ　層　茶褐色粘質土　軽石を所々に含む。古代～近世の遺物包含層。
Ⅳ　層　茶褐色粘質土　シラスの２次堆積土。無遺物層。
Ⅴ　層　砂礫層　遺跡の基盤層である。

第２図　基本土層柱状模式図

第３節　発掘調査の成果

城下遺跡は縄文から近世にかけての複合遺跡である。遺構は検出されなかったものの，遺跡からは土器，土師器，須恵器，陶磁器，古銭，石製品が出土した。土器は細片が多く出土量は少なく，主体となる遺物は古代から近世にかけてのものである。そのために本報告では，遺跡の主体となる古代から中世の遺物を中心に掲載した。遺物の報告については，遺物包含層から各時代の遺物が混在して出土していることから各時代ごとに行う。

１　古墳時代の出土遺物（第４図）

１はⅢ形を呈する鉢形土器である。器壁が厚く，口唇部の上面は平坦に成形されている。丁寧な作りで，内外面に指頭圧痕が多く残っている。古墳時代後期（笹貫式期）頃のものと思われる。

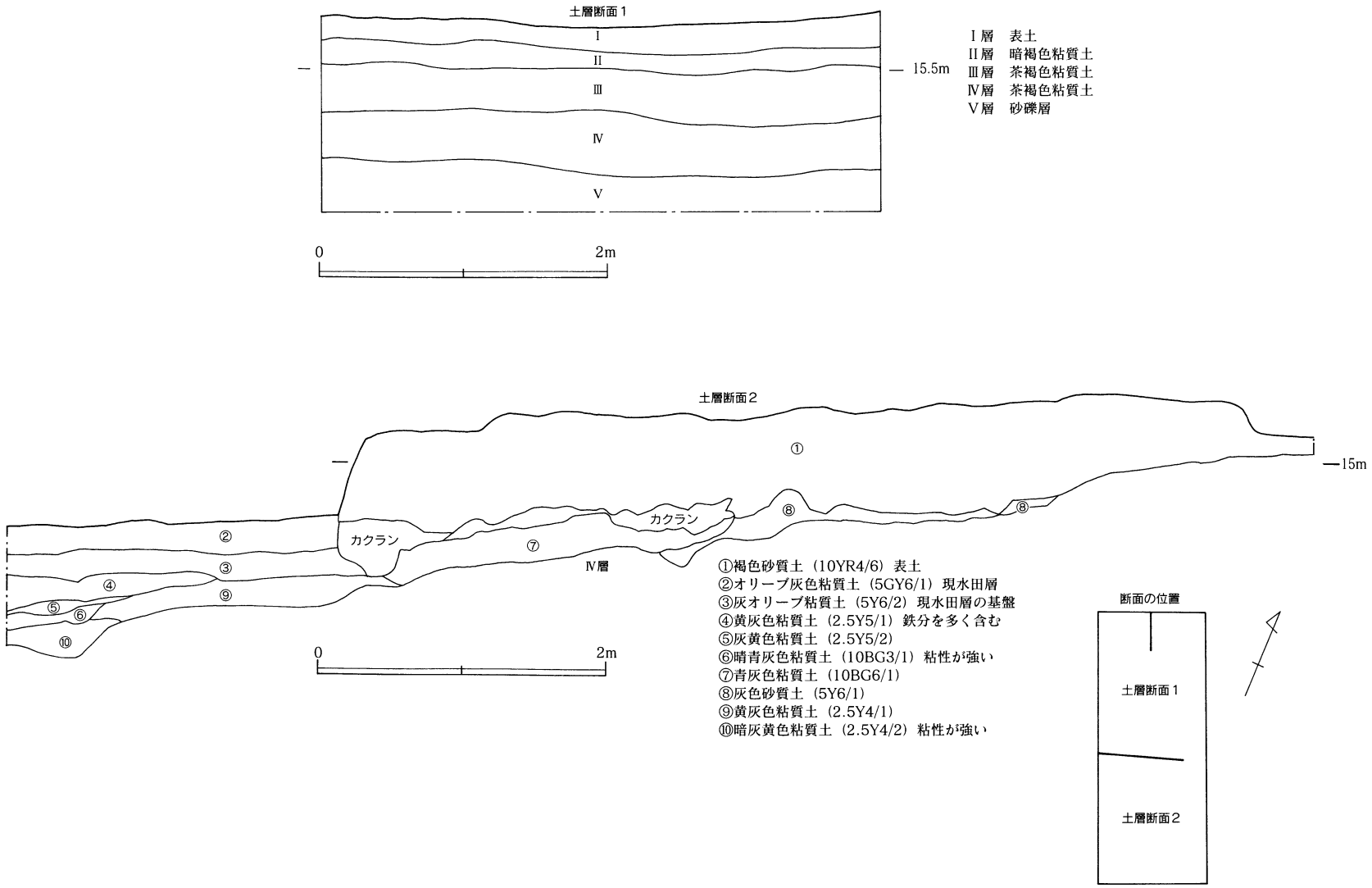
２　古代の出土遺物

（１）土師器（第４図）

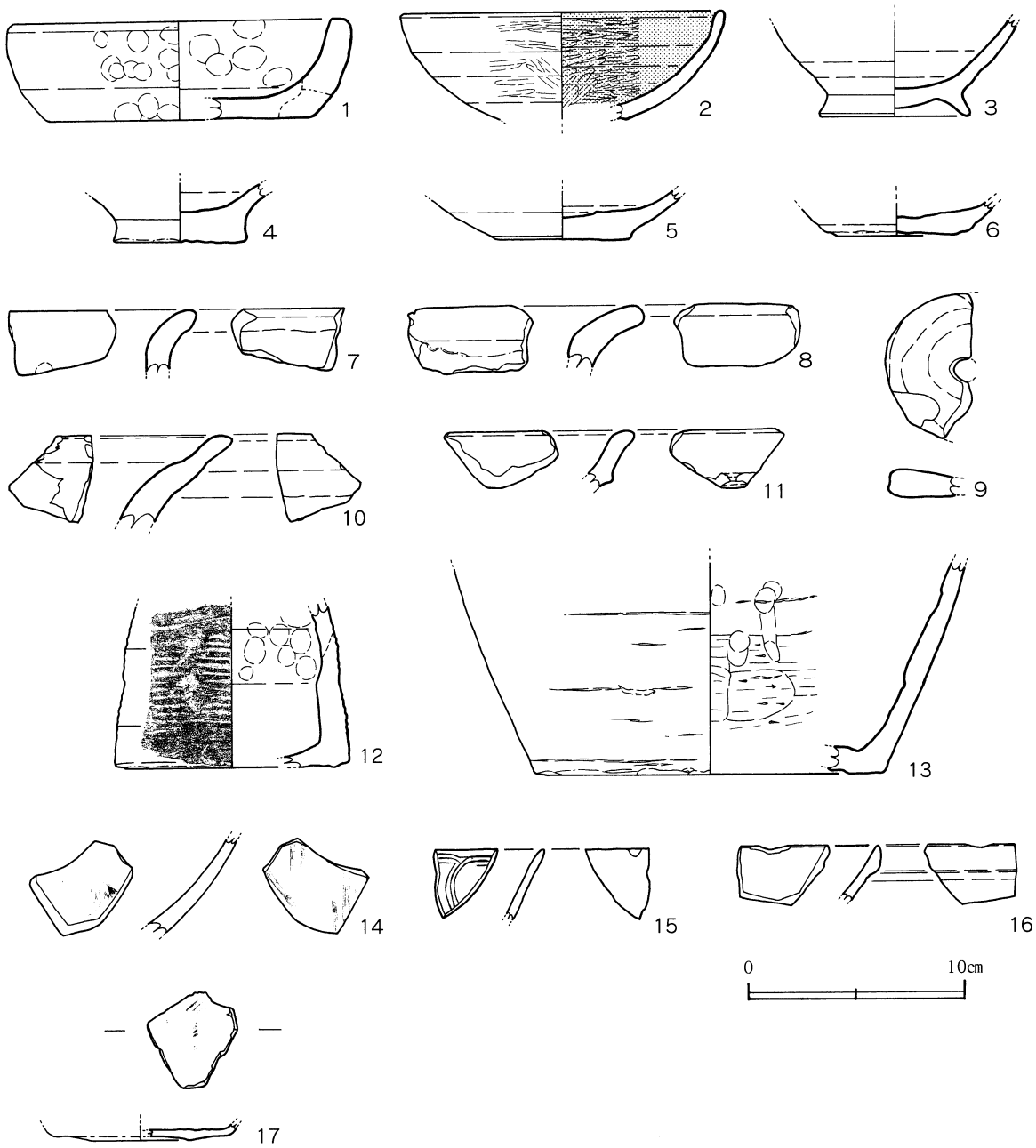
3は椀である。低く横に張り出す高台をもち，体部はわずかに丸みを帯びる。体部外面には横ナデの痕跡が明瞭に残っている。4は低い充実高台で，底部の切り離しはヘラ切りである。

（２）黒色土器（第４図）

２は黒色土器Ａ類である。口縁から体部中央には横方向のミガキが，体部下半には縦方向にミガキが施されている。外面は摩滅している。


土層断面1
I
II
III
IV
V
15.5m
0
2m
I層　表土
II層　暗褐色粘質土
III層　茶褐色粘質土
IV層　茶褐色粘質土
V層　砂礫層
土層断面2
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
カクラン
カクラン
IV層
15m
0
2m
①褐色砂質土（10YR4/6）表土
②オリーブ灰色粘質土（5GY6/1）現水田層
③灰オリーブ粘質土（5Y6/2）現水田層の基盤
④黄灰色粘質土（2.5Y5/1）鉄分を多く含む
⑤灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
⑥晴青灰色粘質土（10BG3/1）粘性が強い
⑦青灰色粘質土（10BG6/1）
⑧灰色砂質土（5Y6/1）
⑨黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
⑩暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）粘性が強い
断面の位置
土層断面1
土層断面2

第3図　土層断面図

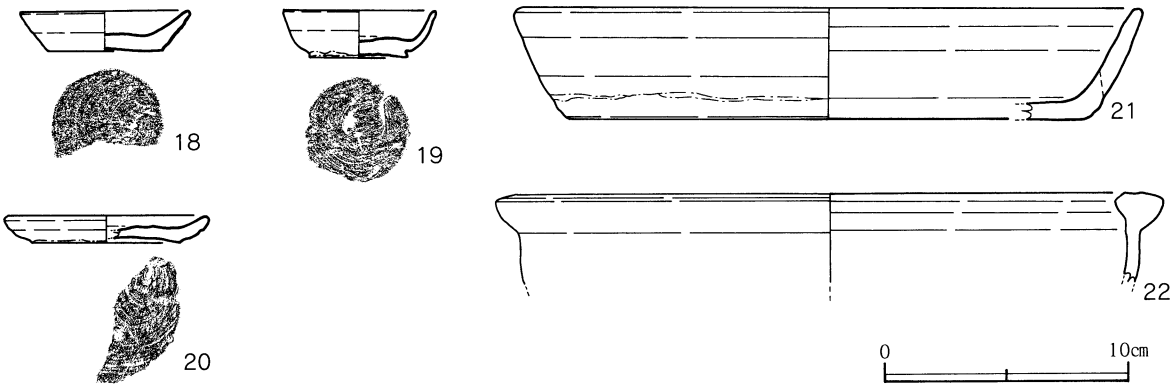


第４図　古墳時代・古代の出土遺物

５・６は坏の底部。底部の立ち上がりが不明瞭である。共に底部の切り離しはヘラ切りで，内外面に横ナデが施されている。６は底部外面に接合痕が見られる。

７・８は甕の口縁である。８の外面には煤の付着が見られる。

９は坏の底部を転用した紡錘車の紡輪である。中央にあけられた穿孔は，直径１㎝程である。全体的に摩滅が著しい。



第５図　中世の出土遺物（1）

（２）須恵器(第４図)

10・11は壺の口縁部である。10は外面の口縁部と頸部の境がわずかに膨らんでいる。外面は自然釉がかかり灰色に発色している。11は二重口縁壺の口縁である。口縁端部は弱く外反し，口縁部と頸部の境に小さな断面三角形の突帯が施されている。内外面は自然釉のために灰白色を呈している。12は壺の体部である。外面は平行線状のタタキが施される。内面はナデ調整で胴部中央付近は指頭圧痕のために凹凸が著しい。

13は壺の底部である。外面は工具によって強くナデられた後，横ナデが施されている。砂粒の移動により器面が荒れ，所々に接合痕がみられる。内面は横方向のケズリの後に縦方向にナデ調整が施されている。ケズリの痕跡は底部に近いほど残りがよく，幅２cmの間隔で接合痕がみられる。

（３）磁器(第４図)

磁器の分類については，大宰府分類を参考にしている。14は同安窯系青磁碗である。外面は縦方向の粗い櫛目文が，内面には櫛状の工具によって細かい櫛目文が施されている。15は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で，内面に劃花文が施されている。16は白磁碗である。口縁部の断面形は間延びした三角形状である。 17は同安窯系青磁の皿である。底部は浅い上げ底で，体部下半以下は施釉されていない。見込みにはヘラ描き文と櫛点描文が施されている。

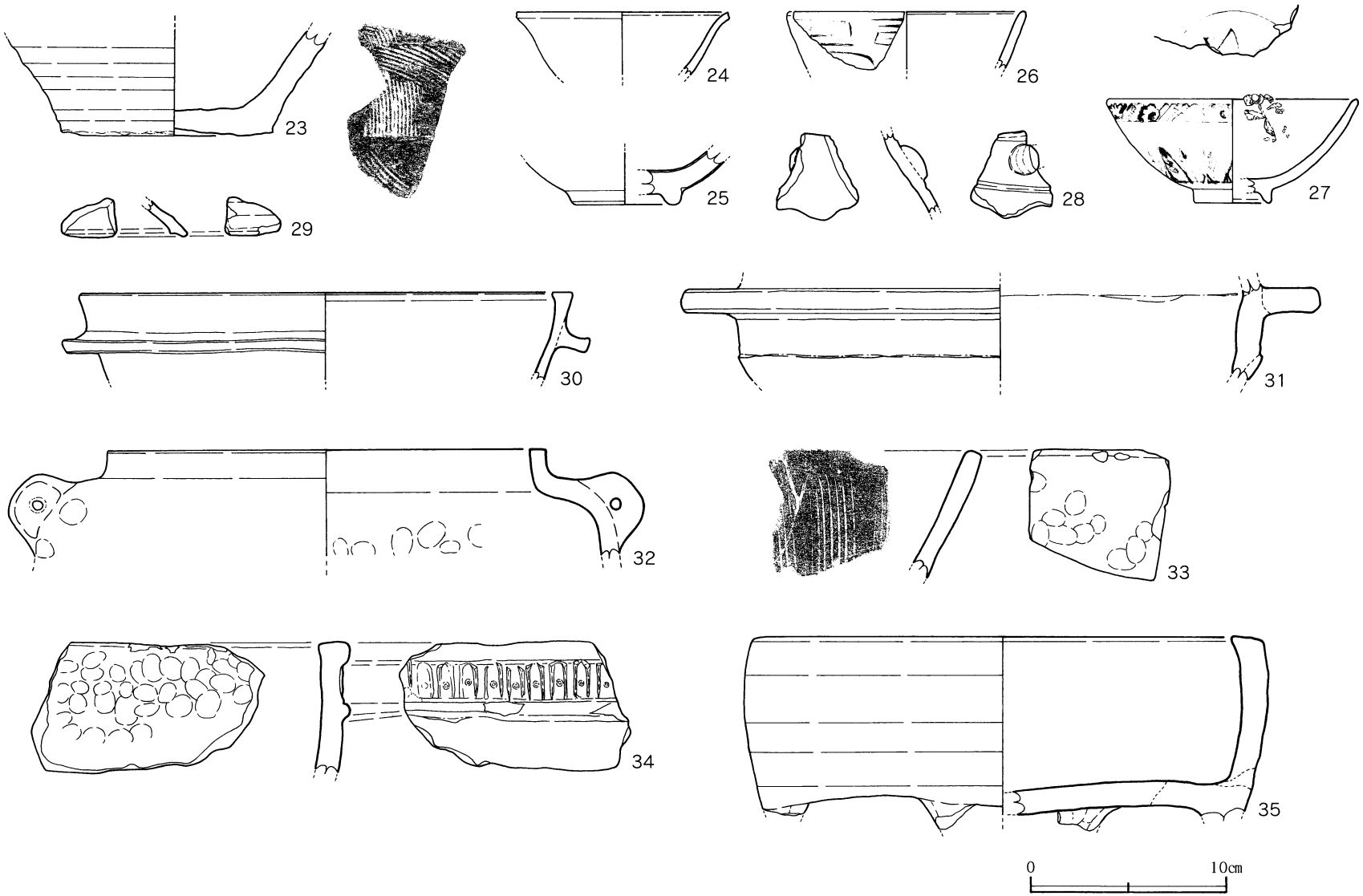
３　中世の出土遺物

（１）土師器（第５図）

18～21は糸切り底の皿である。18は内外面にナデ調整が施される。推定口径７cm，器高1.6cm。19の体部下半には糸切り痕が残っていることから体部をつくった後，円盤状の粘土を貼り付け底部をつくっている。20は器高が1.1cmと低く，底部は浅い上げ底である。21は推定口径が25.5cmの大型の皿である。体部下部には接合痕が残っている。底部の糸切り痕は丁寧にナデ消されている。

（２）陶磁器（第５・６図）

22は中国産陶器の鉢である。口縁部内面はナデのために浅く窪んでいる。全体的に丁寧な



第６図　中世の出土遺物（2）

作りである。23は備前焼の擂鉢である。内面は胴部と底部にかき目が見られ，全面に渡って研磨されている。

24は口禿の白磁椀である。推定口径10.8cm。25・26は龍泉窯系青磁椀である。25の高台は器壁が厚くしっかりとした作りで，体部には連弁文がみられる。内外面の体部から高台にかけて施釉されている。26は口縁部に雷文帯が，胴部には簡略化した連弁文が施されている。27は中国産の染付碗である。口縁部には波濤文，体部には芭蕉葉文がみられ，見込みには連花文が施されている。２次焼成を受けているために器面全体が荒れており，口縁部内面には溶けた釉が付着している。28は四耳壺の肩部と思われる。把手は横方向に付いており，その上下に１条のヘラ描沈線文が残っている。全体的に丁寧な作りで，内外面は施釉のために灰オリーブ色を呈している。29は瀬戸焼の蓋と思われる。口縁内面は小さく突出している。緻密な胎土を使用し，内面から口唇部の外面にかけて施釉されている。

（３）瓦質土器（第６図）

30・31は羽釜である。30は口縁内面が小さく突出し，器壁が薄く丁寧な作りである。羽は上胴部に下向きについている。口縁部から胴部にかけては赤橙色を呈しているが，羽以下は褐灰色である。31は胴部中央に水平に羽がつき，破片の下部に残っている接合痕を境に器壁が薄くなる。胴部外面と羽の一部が黒色を呈している。32は湯釜である。口縁部は短く直立し，胴部は丸みを帯びて膨らむ。肩部の把手には，直径６㎜の穿孔が施されている。

33は擂鉢の口縁部である。内面は全体的に研磨されていて，かき目がみられる。外面には多くの指頭圧痕が残っている。34・35は火鉢である。34は口縁部と上胴部の突帯の間に，縦方向の沈線文と竹管文が施されている。内面には指頭圧痕が多く残る。35は底部の端に４箇所短い脚がつくと推定される。体部は垂直に立ち上がり，口縁部の内面は小さく突出している。

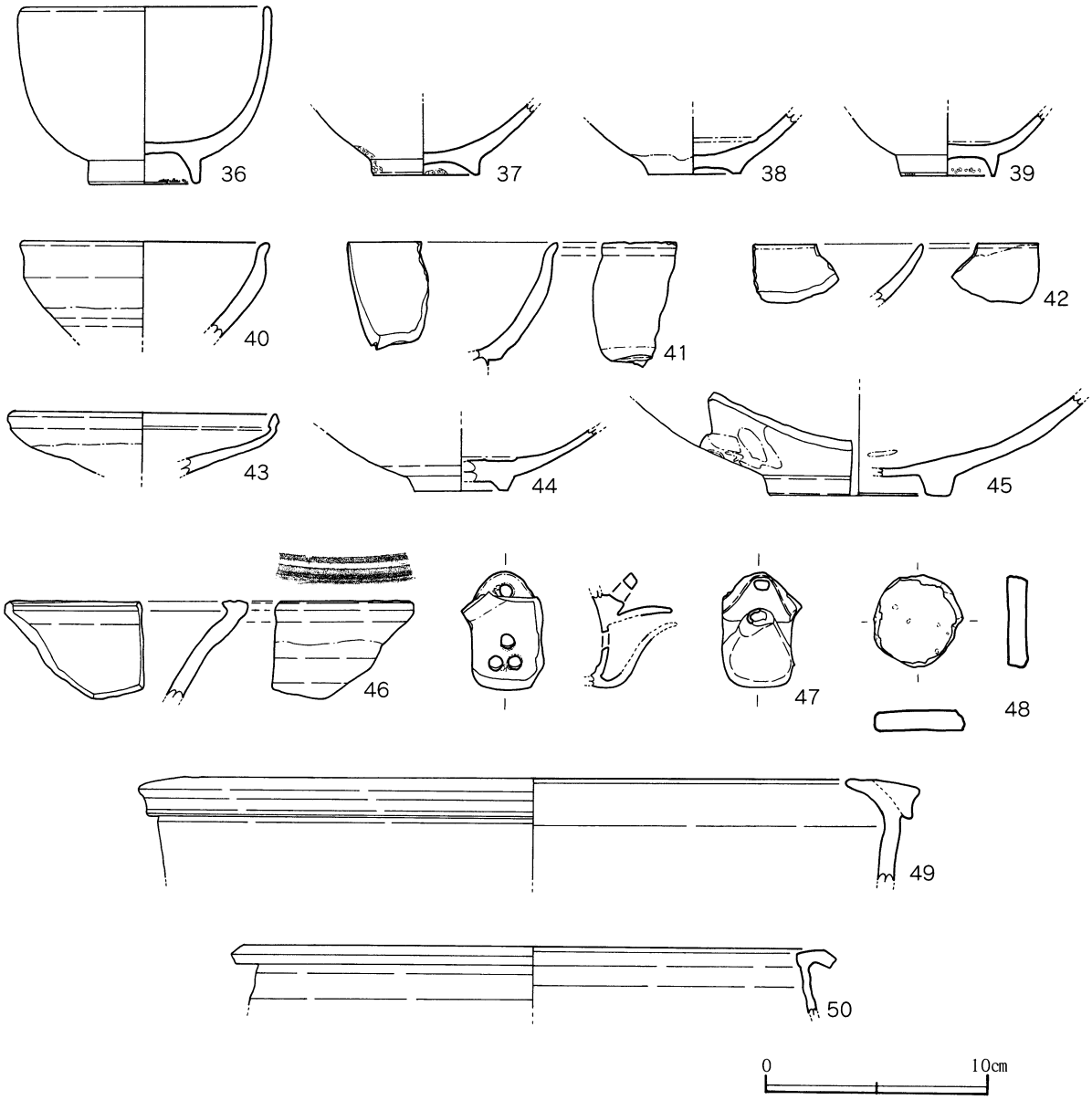
４　近世の出土遺物

（４）陶器（第７図）

36～41は碗である。36は推定口径11.3cm，器高7.9cmである。全体に透明釉がかかり，浅黄色を呈している。高台の内面には砂粒が付着している。37・38は肥前系の碗である。37は高台の内面から畳付にかけて砂粒が付着している。38は体部内面に重ね焼きの痕跡が残っている。体部内面から，外面の体部下半にかけて灰オリーブ色の釉がかかっている。39は内外面に巻刷毛目が施されている。高台の内面には砂粒が付着している。40・41は天目茶碗である。両方とも口縁部が弱く外反し，内面から体部下半にかけて鉄釉がかかっている。丁寧な作りである。

42は唐津産の皮鯨の皿である。口唇部は鉄釉がかかるために暗赤褐色を呈する。43は杯と思われる。口縁部は短く直立し，内面に１条の浅い沈線が施されている。44・45は鉢である。44は内野山窯産で内面は銅緑釉がかかり，蛇の目釉剥ぎが施されている。45は見込みに目跡が２か所残っている。

46は盤である。口縁部は内側へ突出し，口縁部上面に２条の浅い沈線が施されている。口縁外面にはにぶい赤褐色の釉がかかっている。



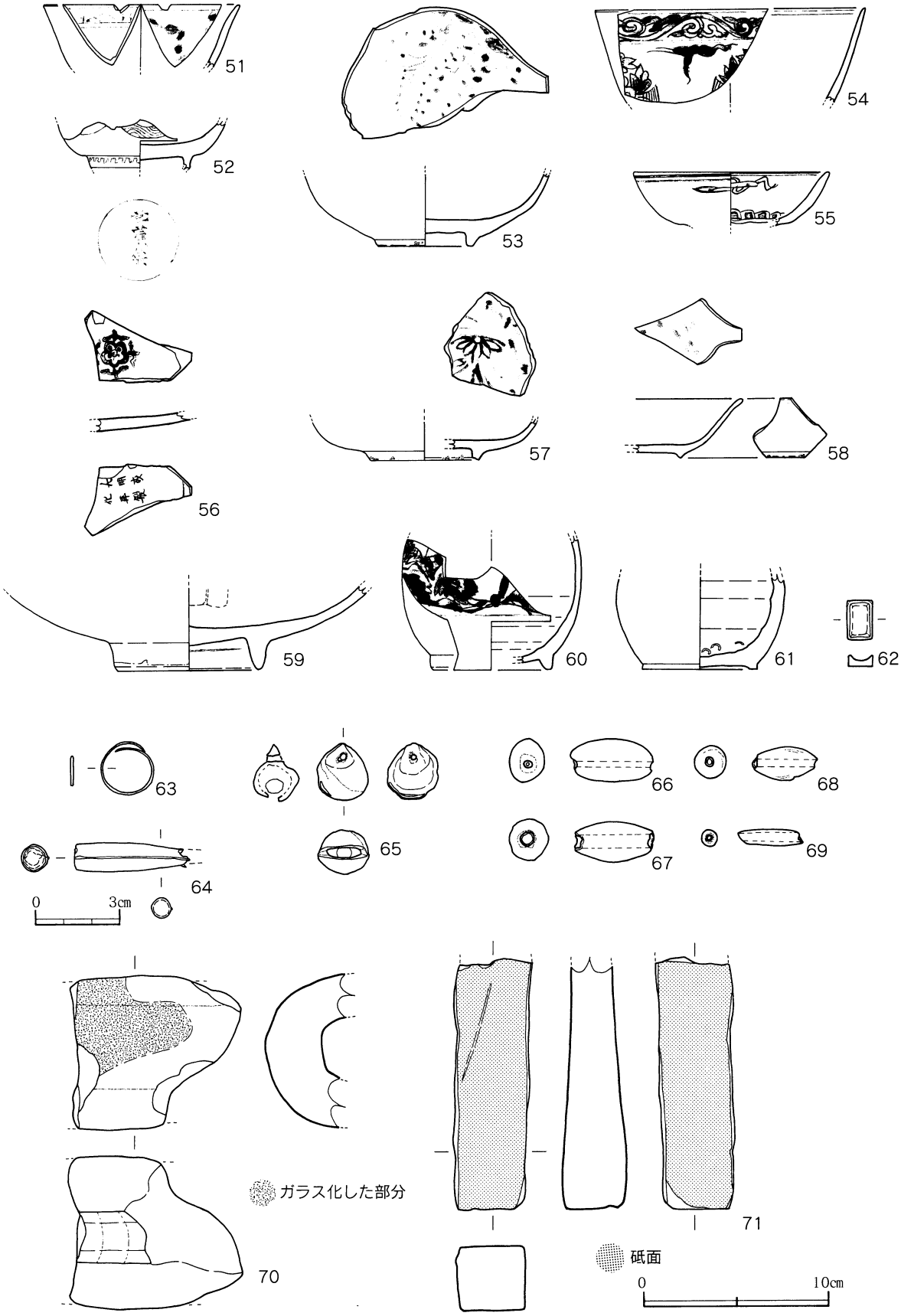
第７図　近世の出土遺物（1）

47～50は薩摩焼である。47は急須の注口である。48の円盤状土製品は周辺を丁寧に打ち欠いてつくっている。49は半胴甕である。丁寧な作りで，口縁部上面には貝目が残っている。50の甕は口縁が逆L字状で，胴部の器壁は２㎜と薄い。

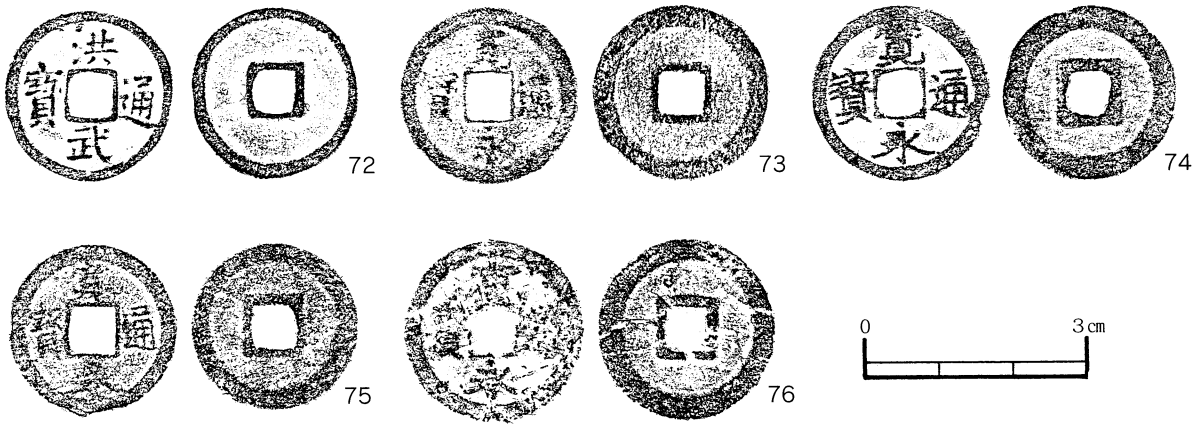
（5）磁器（第８図）

51は在地産の端反り椀である。口縁内面の文様は四方襷文と思われる。

52・53肥前系の鉢である。52は高台の内面に「芭蕉製」の銘がみられる。佐賀県楠木谷１号窯に出土例がある。53は見込みに植物の文様が描かれている。底部には少量の砂粒が付着している。54は景徳鎮系の鉢である。口縁部には唐草文が施されている。



第8図　近世の出土遺物（2）



第９図　出土古銭

55～57は肥前系の皿である。55の見込みには花文と思われる文様がみられる。56は見込みに花文が，外面には「大明成化年製」の銘が残っている。57の内面には花文が描かれ，畳付には砂粒が付着している。58は中国産の皿である。59は盤と思われる。全体的に明緑色を呈し内面には文様がみられる。精良な胎土を使用している。

60は肥前系の袋物である。内面には横ナデの痕跡が明瞭に残っている。61の袋物は底部が小さな高台を呈する。外面には透明釉がかかり，明褐色を呈しているが，剥落して胎土が露出している部分もある。内面には横ナデの痕跡や工具痕が残っている。焼成不良の近世磁器と思われるが，時期が古くなる可能性も考えられる。

62は方形の小容器である。

（６）金属製品（第８図）

63は厚さ１㎜，幅1.1㎝の銅板を円形に曲げたもの。64は青銅製の煙管である。吸口部には竹製の吸管片も残っている。

（７）土製品・石製品（第８図）

65は土製の鈴である。上部のつまみ部には直径４㎜の穿孔が施され，鈴の中には直径約８㎜の土製の小玉が入っている。

66～69は土錘である。平面形は紡錘形を呈し，幅，長さ様々なものがある。３㎜～９㎜の穿孔が施されている。

70は土製の羽口である。外面は部分的にガラス化し黒色を呈している。推定内径3.1㎝。

71は砥石である。正面，裏面共に研磨されているために中央に向かって器壁が薄くなる。天草産の石材を使用していると思われる。

（8）古銭（第9図）

総数5枚の古銭が出土した。遺存状態が良く，銭文がはっきりと観察できる。72は洪武通寶，73～76は寛永通寶である。全て背文は無文である。

第1表　出土古銭観察表

挿図番号	遺物番号	銭貨名	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	背文字
9	72	洪武通寶	2.3	0.16	0.6	2.4	なし
9	73	寛永通寶	2.4	0.11	0.6	2.5	なし
9	74	寛永通寶	2.4	0.14	0.5	2.7	なし
9	75	寛永通寶	2.3	0.1	0.6	2.3	なし
9	76	寛永通寶	2.5	0.13	0.6	2.5	なし

第2表　出土遺物観察表

()は復元径

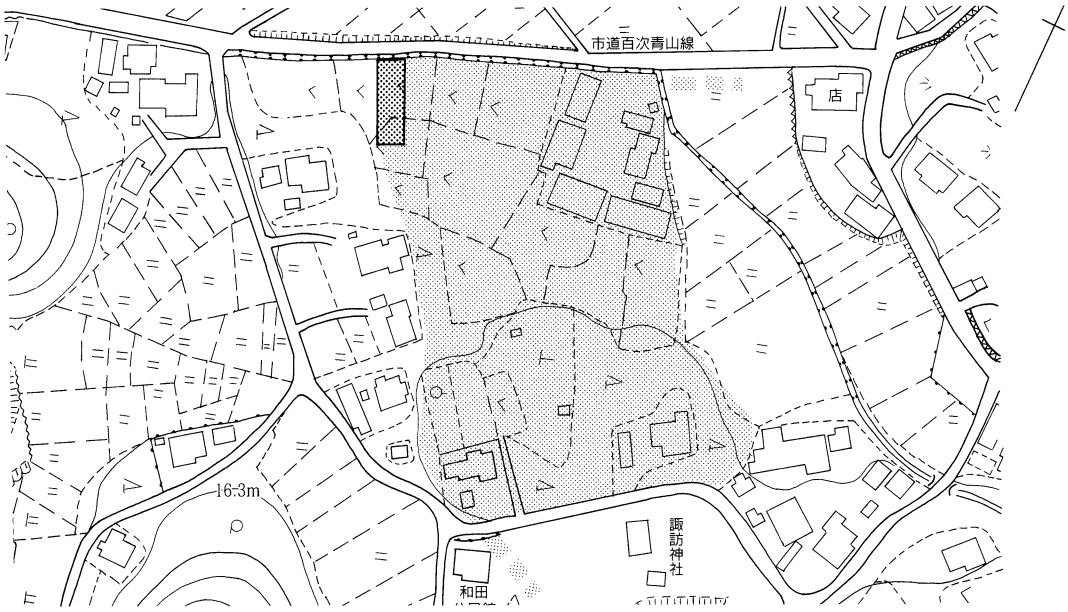
挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
5	1	土器	鉢	A-3	灰白色2.5Y7/1	ナデ	横ナデ	(15.8)		4.4	石英，角閃石を多く含む	良好	
5	2	土師器	椀	A-2	外:浅黄橙色10YR8/3 内:黒色10YR7/1	ミガキ	ミガキ	(14.8)			砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	3	土師器	椀	A-1	内外:灰白色2.5Y8/	横ナデ	横ナデ		6.9		1～2㎜大の角閃石を多く含む	良好	
5	4	土師器	椀	A-1	外:灰白色2Y7/1 内:灰白色10YR8/3	横ナデ	横ナデ		6.2		砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	5	土師器	坏	A-1	外:黒褐色10YR3/1 内:灰白色10YR8/2	横ナデ	横ナデ		(6.2)		砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	6	土師器	坏	A-3	内外:浅黄色2.5Y7/3	横ナデ	横ナデ		(6.8)		石英、角閃石の粒子を多く含む	良好	
5	7	土師器	甕	A-2	内外:黄褐色10YR5/6	横ナデ	横ナデ				1㎜大の砂粒を含む	良好	
5	8	土師器	甕	A-2	内外:黄褐色10YR6/2	横ナデ	横ナデ				所々に2㎜大～4㎜大の石英，小石を含む	良好	
5	9	土師器	紡錘車	A-3	内外:灰黄褐色10YR6/2	摩滅	摩滅	直径(6.8)			砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	10	須恵器	甕	表土	内外:灰色10Y4/1	回転横ナデ	回転横ナデ				精製された胎土	良好	
5	11	須恵器	壷	A-3	内外:灰白色N7/	横ナデ	横ナデ				2，3㎜の小石を少量含む	良好	
5	12	須恵器	壷	B-3	外:灰黄褐色10YR5/2 内:黄灰色2.5Y5/1	平行タタキ	横ナデ		(10.6)		砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	13	須恵器	壷	A-3	内外:灰色色N5/	擦過後ナデ	ケズリ後ナデ	(16)			1～2㎜大の長石を所々に含む	良好	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
5	14	青磁	碗	A-1	内外:灰オリーブ色10Y5/2	内外面櫛目文					灰白色精良	精良	同安窯系 大宰府分類Ⅲ-Ⅰ類(12c中～後)
5	15	青磁	碗	A-2	内外:灰オリーブ色7.5Y5/2		劃花文				灰白色精良	精良	龍泉窯系 大宰府分類Ⅰ－Ⅳ類(12c中～後)
5	16	白磁	碗	A-3	内外:明オリーブ灰色2.5GY7/1						灰白色良	精良	大宰府分類Ⅳ類(11c後～12c後)
5	17	青磁	皿	A-1	釉薬部分:緑灰色10GY6/1 露胎部分:暗灰色2.5Y5/2	横ナデ	ヘラ描き文櫛点描分		(4.4)		灰白色精良	良好	同安窯系 大宰府分類Ⅲ-Ⅰ類
6	18	土師器	皿	B-3		横ナデ	横ナデ		(4.6)	1.6	精製された胎土	良好	
6	19	土師器	皿	A-1	内外:浅黄色2.5Y7/3	横ナデ	横ナデ	(6.3)		1.9	精製された胎土	良好	
6	20	土師器	皿	A-2	内外:にぶい黄橙色10YR7/4	横ナデ	横ナデ	(8.4)		1.1	1mm大の砂粒を少量含む	良好	
6	21	土師器	皿	A-3	内外:淡黄色2.5Y8/3	横ナデ	横ナデ	(25.5)	(21)	4.6	精製された胎土,ごく細かな砂粒が少量含まれている	良好	
6	22	陶器	鉢	A-3	内外:にぶい黄橙10YR6/3	回転横ナデ	回転横ナデ	(27)			1mm大の砂粒を少量含む	良好	中国産
7	23	陶器	擂鉢	A-3	外:赤色10R5/6 内:赤褐色10R4/3	横ナデ			(10.8)	4.9	1mm大の砂粒を多く含む	良好	備前焼
7	24	白磁	碗	3T	内外:灰白色 7.5Y7/1			(10.8)		4.9	白色精良	精良	大宰府編年Ⅳ類(13c中～14c前)
7	25	青磁	碗	A-3	内外:灰オリーブ7.5Y5/3				(5)		灰色良	精良	龍泉窯系大宰府編年Ⅱ類(13c前～14c代)
7	26	青磁	碗	A-1	内外:灰白色7.5Y8/1	口縁:雷文帯 胴部:連弁文		(6)			灰白色精良	精良	龍泉窯系上田分類(14c後半)類
7	27	陶磁器	染付碗	B-3		口縁:波涛文 体部:芭蕉葉文 見込み:連花文		(12.4)			白色良	精良	2次焼成を受けている。小野分類染付碗c群(16c後～17c中)
7	28	陶器	壷	A-2	内外:灰オリーブ7.5Y6/2	横ナデ	横ナデ				灰色良	良好	把手有
7	29	陶器	蓋	A-2	内外:オリーブ黄色7.5Y6/3	回転横ナデ					灰白色良	良好	瀬戸焼
7	30	瓦質土器	羽釜	A-3	内外:淡赤橙2.5YR7/4	回転横ナデ	回転横ナデ	24.8			1mm大の砂粒を含む	良好	
7	31	瓦質土器	羽釜	A-1	内外:浅黄色2.5Y7/3	回転横ナデ	回転横ナデ	胴部径(26.6)			1mm大の石英,角閃石を所々に含む	良好	
7	32	瓦質土器	湯釜	A-3	内外:灰色5Y7/1	回転横ナデ	回転横ナデ	22.3			所々に1～2mm大の砂粒を含む	良好	
7	33	瓦質土器	すり鉢	A-3	内外:浅黄色2.5Y7/3	ナデ	ナデ				1mm以下の長石,石英を多く含む	良好	
7	34	瓦質土器	火鉢	B-3	外:灰黄褐色10YR4/2 内:褐灰色10YR6/1	ナデ	ナデ				砂粒を含まない胎土	良好	
7	35	瓦質土器	火鉢	A-3	内外:にぶい黄橙色10YR7/2	横ナデ	横ナデ	(25.8)		8.8	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	
8	36	陶器	碗	A-2				(11.3)	(5.2)		灰白色精良	良好	
8	37	陶器	碗	表土					(4.6)		灰白色精良	良好	備前系 17c～18c
8	38	陶器	碗	A-2					4.2		にぶい黄色良	良好	備前系
8	39	陶器	碗	A-3		巻刷目			(4.2)		浅黄色良	良好	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
8	40	陶器	碗	表土		体部下半削り		(11.2)			灰白色良	良好	鉄釉
8	41	陶器	碗	A-1							灰白色良	良好	鉄釉
8	42	陶器	皿	B-3							灰白色良	良好	唐津産 口縁に鉄釉
8	43	陶器	杯	A-2		回転横ナデ		(12.2)			灰色良	良好	
8	44	陶器	鉢	表土			銅緑釉蛇の目釉剥ぎ		(4.2)		灰白色良	良好	内野山窯産
8	45	陶器	鉢	A-3		回転横ナデ			(8.2)		灰褐色良	良好	
8	46	陶器	鉢	B-2		回転横ナデ					にぶい赤褐色良	良好	
8	47	陶器	急須	3T			回転横ナデ				赤褐色良	良好	
8	48	陶器	メンコ	3T				幅4 厚さ0.8 長さ3.9			褐灰色粗	良好	
8	49	陶器	甕	A-3		回転横ナデ	回転横ナデ	(34.4)			にぶい赤褐色粗	良好	
8	50	陶器	甕	A-1		回転横ナデ	回転横ナデ	(27)			褐灰色良	良好	
9	51	磁器	碗	B-3			四方襷文	(10.64)			灰白色精良	精良	19c前半
9	52	磁器	鉢	表土					(5.4)		灰白色精良	良好	「芭蕉製」の銘有
9	53	磁器	鉢	表土			植物文	(5.2)			灰白色精良	良好	
9	54	磁器	鉢	A-3		唐草文		(14.8)			灰白色精良	良好	16c後半～17c前半
9	55	磁器	皿	A-1			花文	(10.6)			灰白色良	良好	16c後半～ 18c前半
9	56	磁器	皿	A-2							灰白色精良	良好	「大明成化年製」の銘有
9	57	磁器	皿	A-1			花文		(5.8)		灰白色良	良好	17c後半
9	58	磁器	皿	A-1						3.15	灰白色精良	良好	
9	59	青磁	盤	A-1	内外:明緑灰色 10GY8/1	回転横ナデ	回転横ナデ		(7.6)		灰白色精良	良好	
9	60	磁器	袋物	B-2			回転横ナデ		(6.4)		灰白色精良	良好	
9	61	磁器	袋物	A-1	外:明褐色 7.5YR5/6		横ナデ		(6.2)		灰白色良	良好	
9	62	磁器	小容器	3tr				幅1.3 長さ2.1 高さ0.5			灰白色精良	良好	
9	63	銅製品	不明	A-2				幅1.2 縦1.9 横1.9 重さ4.6g					
9	64	銅製品	煙管	A-2				幅0.95 長さ4.1 重さ4.9g					竹製の吸管部が残る。
9	65	土製品	土鈴	6T	内外:浅黄橙 7.5YR8/3			長さ3 厚み2.3 重さ9g			細かい砂粒を含む	良好	
9	66	土製品	土錘	A-1	内外:灰色5Y4/1 粗	摩滅	摩滅	長さ4.35 厚み1.8 重さ16.4g			角閃石の粒子を多く含む	良好	
9	67	土製品	土錘	A-3	内外:橙色 2.5YR6/8粗	摩滅	摩滅	長さ4.1 厚み2.1 重さ14.5g			細かい砂粒がみられる精製された胎土	良好	
9	68	土製品	土錘		内外:灰白色 10YR8/2			長さ3.45 厚み1.8 重さ8g			細かい砂粒が少量混ざる, 精製された胎土	良好	
9	69	土製品	土錘	A-3	内外:にぶい橙 5YR6/3	摩滅	摩滅	長さ3.25厚み1.0重さ1.9g			砂粒を含まない精製された胎土	良好	
9	70	土製品	羽口	B-3	外:灰色2.5Y7/1 内:にぶい橙色 7.5YR7/4		ナデ	内径(3.1)			1mm大の砂粒が多く見られる	良好	外面の一部がガラス化
9	71	石製品	砥石	A-3				幅4.1 長さ13.4 厚さ3.3 重さ300g					天草石の可能性

第２章　遺跡の残存状況

全面調査区は谷への落ち際にあたるために，遺構は検出されなかった。しかし，古墳時代～近世にかけての遺物が出土したことから調査区の東側に遺跡が広がることが予想される（第10図）。特に古代～中世においては，遺跡後方の台地上に上野城跡，善応寺跡が残っていることから注意が必要である。今後も周辺に広がる遺跡の保護に努めながら開発との調整を計っていく必要がある。



第10図　遺跡の残存範囲（１/2500）

第３章　発掘調査のまとめ

城下遺跡は古墳時代から近世にかけての複合遺跡である。谷の縁辺部にあたるために，遺構は検出されなかったが，古代から近世を中心とする遺物が出土した。これらの遺物は，全面調査区の東側及び背後の権現原台地から供給されたと考えられる。出土した古代の土師器，須恵器は９世紀後半～10世紀頃のものと考えられる。龍泉窯系，同安窯系の青磁椀・皿は12世紀中頃から後半頃のものであり，白磁も同時期のものと考えられる。

中世の青磁，磁器については連弁文や雷文帯の施された青磁，芭蕉文をもつ磁器が出土することから13世紀～16世紀頃と考えられる。出土している羽釜や湯釜，甕，火鉢などは中世後半頃に属すると思われる。古代から中世にかけては，城下の字名に現れているように，遺跡後方の台地上に所在する上野城跡や善応寺跡との関係が注目される。

近世陶磁器の主体を占めるのは，肥前系で，在地産の平佐焼と思われるものは１点のみの出土である。遺物の所属年代は16世紀後半～17世紀頃が中心である。金属製品や土錘，土製品，羽口はその形態から近世に属すると思われる。

これまで隈之城平野周辺で見つかっている遺跡は台地上の立地するものがほとんどであった。城下遺跡の調査で，台地と平野の境に広がる遺跡の存在が明らかとなった。城下遺跡では古代以降の遺物が主体を占めている。川内平野における条里制の導入は隈之城平野を起点に始まったことが指摘されており，このような歴史的な背景との関係が注目される。楠元遺跡の調査成果と含めて川内平野における遺跡の広がりを再考する時期にきている。

図　　版

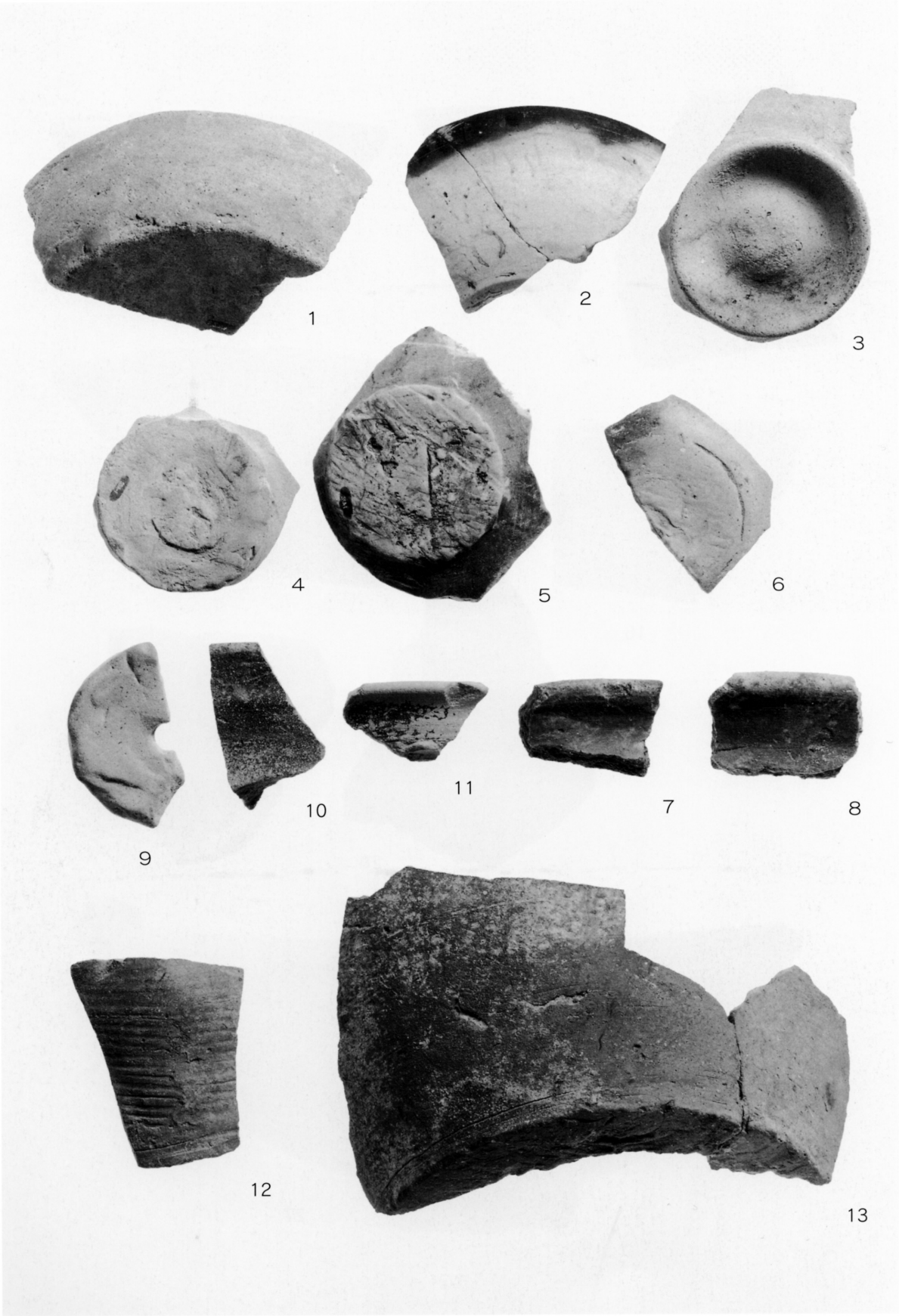
土層断面図

3 トレンチ遺物出土状況

図版 2

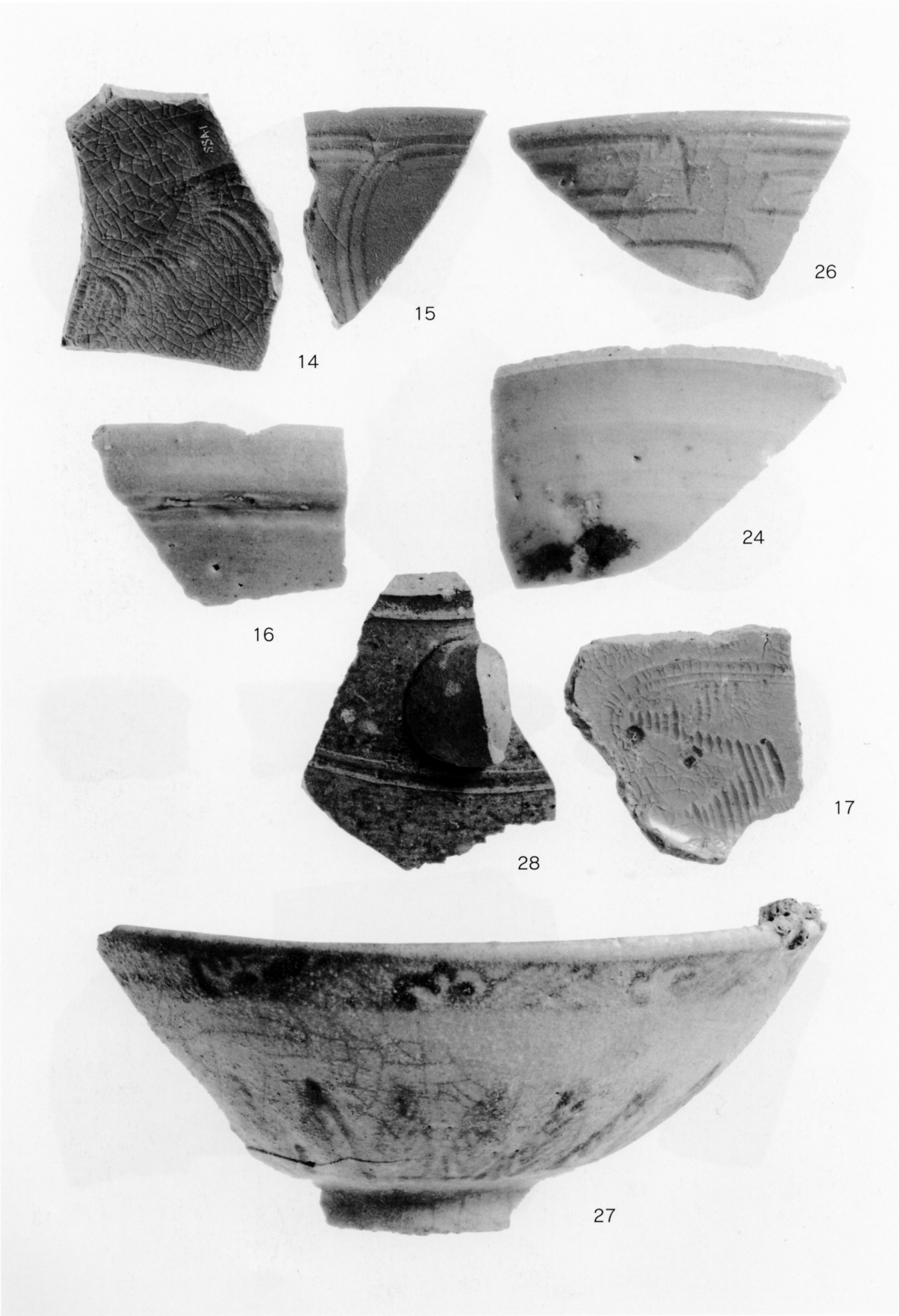
遺物出土状況

作業状況

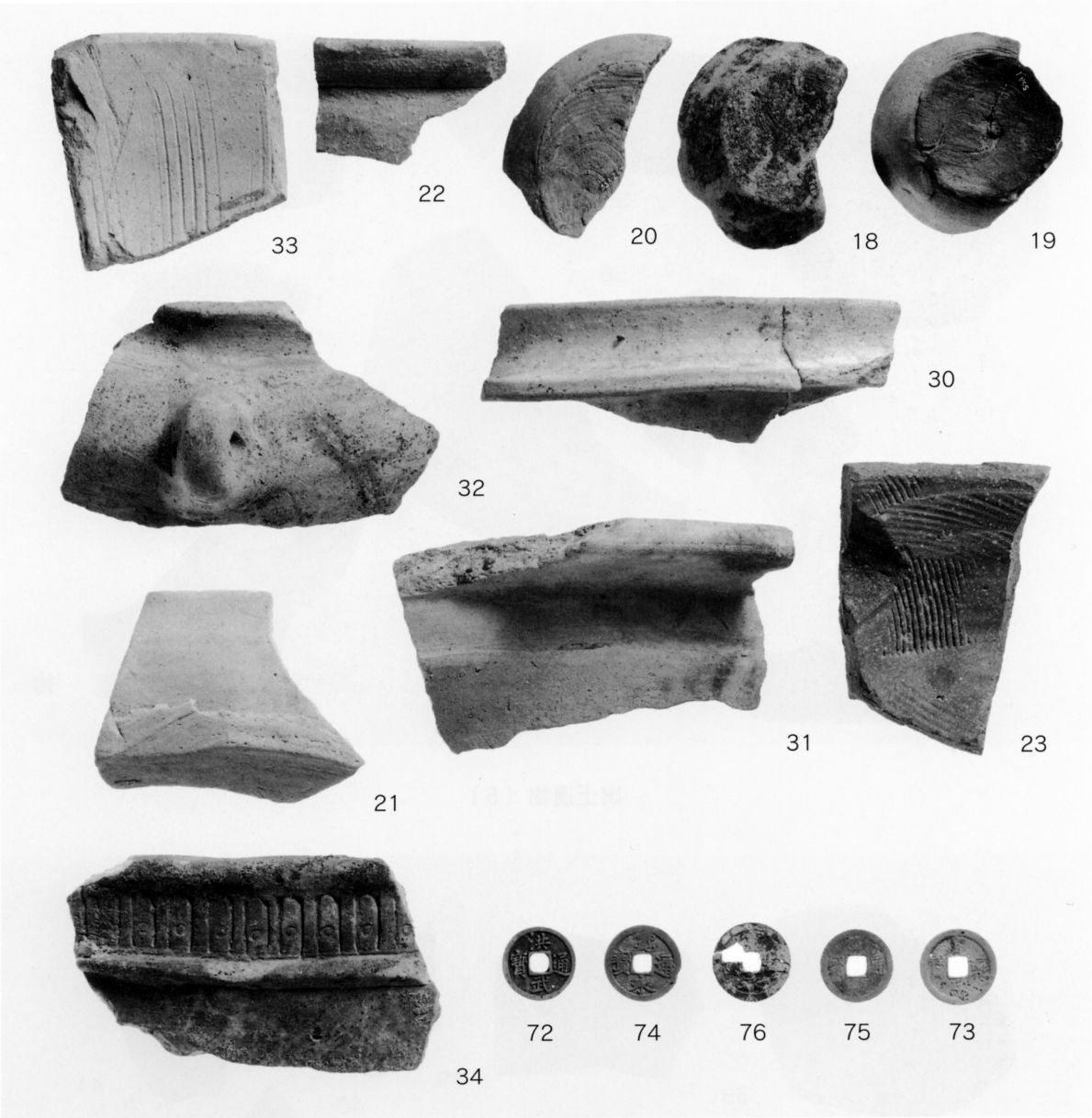


出土遺物（1）

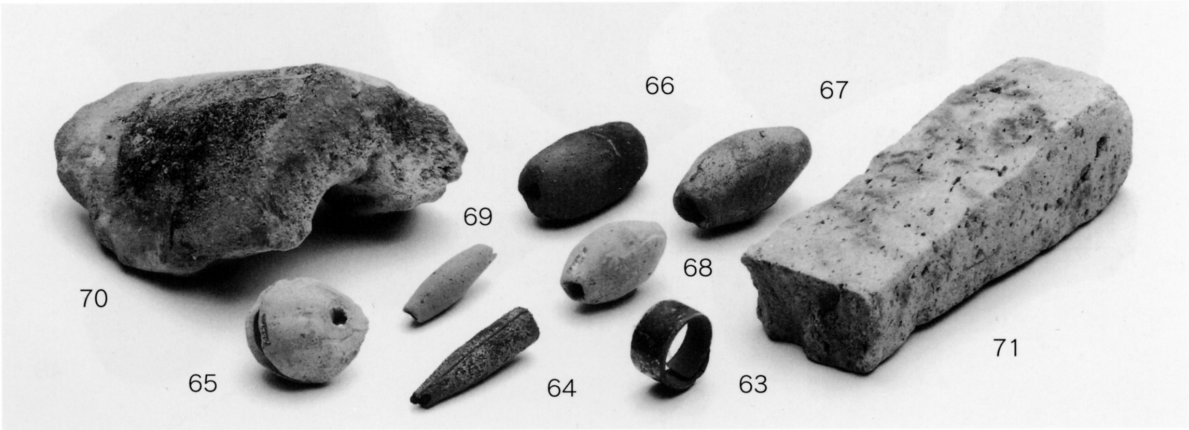
図版 4



出土遺物（2）

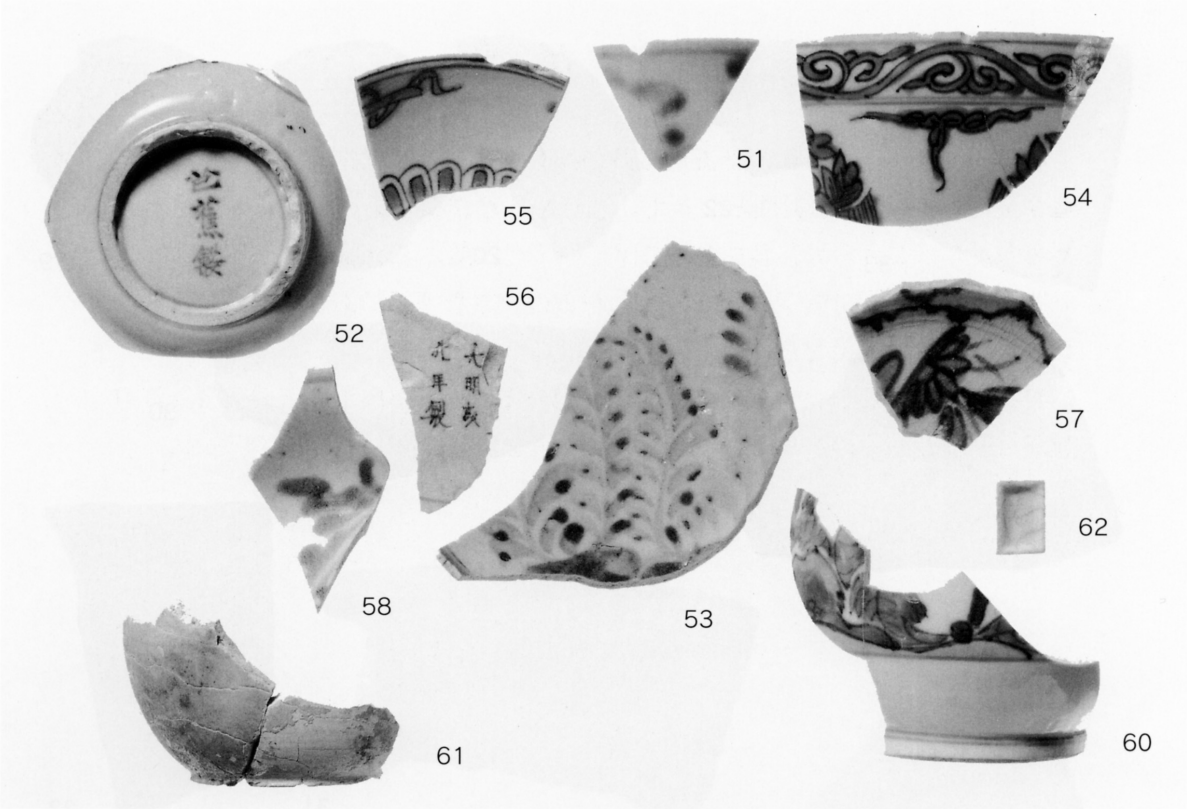

33
22
20
18
19
30
32
31
23
21
34
72
74
76
75
73

出土遺物（3）

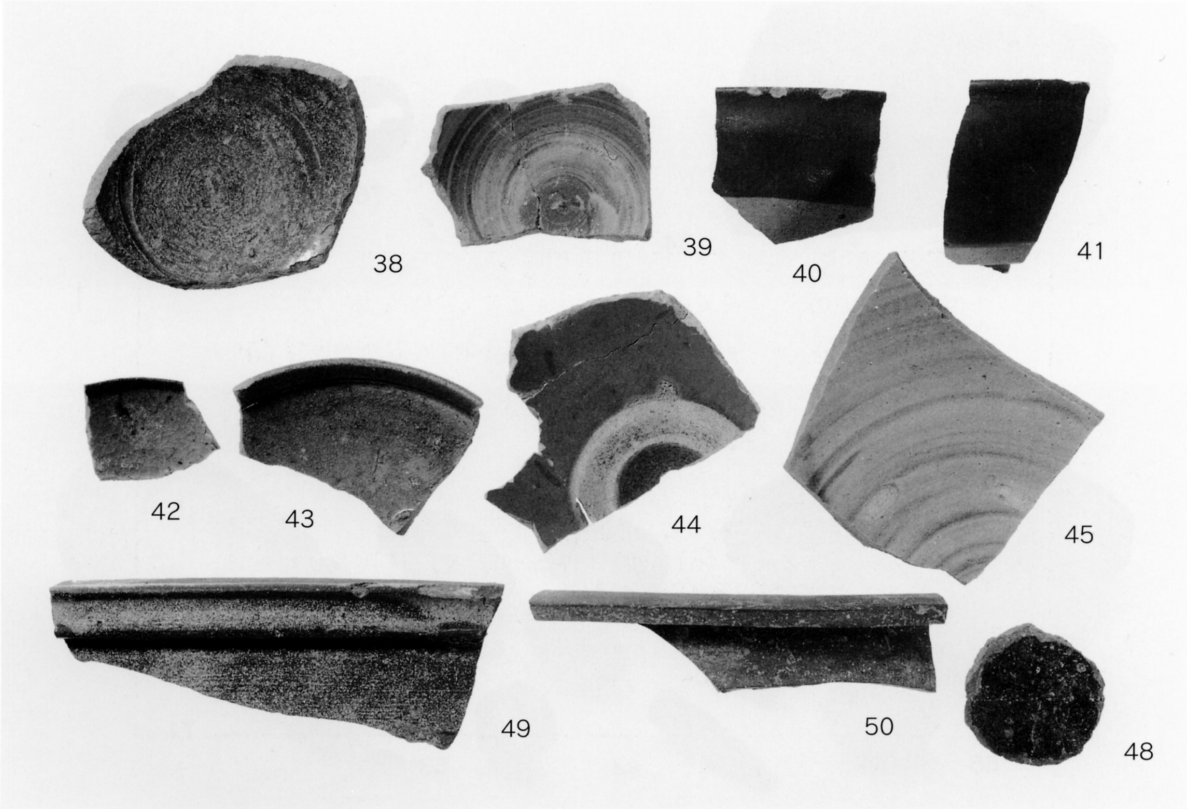

66
67
69
68
70
71
65
64
63

出土遺物（4）

図版 6



出土遺物（5）



出土遺物（6）

あ と が き

楠元遺跡の発掘調査は，低湿地遺跡の調査方法や出土遺物の保存処理を考え直す上で1つの大きな契機となった。調査や整理作業は不充分な点が多く，悔やまれるが，これらの経験を今後の調査や整理作業に活かしていきたい。

報告書作成作業は終了したが，これからの大きな課題である木製品の保存処理や出土遺物の活用などに積極的に取り組んでいきたい。

発掘調査から報告書作成にあたり，地元の作業員・川内市教育委員会・鉄道建設公団など多くの方々からご指導やご支援を頂き，深く感謝いたします。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（57）

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅵ）

楠元・城下遺跡

発行日　平成15年3月24日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1
☎(0995)48-5811
印刷所　斯文堂株式会社
〒892-0838　鹿児島市新屋敷町14-16
☎(099)226-3747